

---

# Missing Link

冴川明希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Missing Link

### 【ノード】

N1013F

### 【作者名】

沢川明希

### 【あらすじ】

自分の本当の名前、呼ばれますか。誰も僕の『名前』を呼んでいない。ずっと僕を呼んでいたのは月だった。

失われた環。  
ある系列の中で欠けている要素のこと。

\*\*\*

僕は知っている。

誰ひとりとして僕を、僕の本当の名を呼んではいない。

頭の奥で反響する何か。

誰かの、声。

幾度も幾度も。

もうずっと、その何かに僕は呼ばれ続けている。

それは僕の名前じゃない。

それは僕のことじゃない。

ああなに、その鈍く響く鈴の音が僕を呼んでいるだと本能的に知つてゐる。

僕は、誰だ。

僕は、何だ。

そこで僕を呼んでいるのは

葛<sup>かずら</sup>汎<sup>ひら</sup>珠<sup>じゅ</sup> は八歳の春のある日の出来事を今でも鮮明に覚えている。褪

せることの無いそれは、繰り返される記憶の再生の賜物だ。

その日。校庭の桜が数輪漸く綻び始め、淡い花びらを僅かにその枝に纏ついていた。

「かずら……葛……」

この春から新たに赴任して来た若い教師が、困ったように名簿と番号を照らし合わせ、席に座る少年を見ている。彼は不思議そうな面持ちで、自分が呼ばれるのを待つていた。

「ごめんなさい。葛の次、何て読むのかな？」

教師の顔を見ていた少年は一瞬の空白の後「こだまです」と応えた。彼女は口の中でちいさくその名を繰り返し名簿にルビをふる。そして爽やかな笑顔でこつ言つた。

「綺麗な名前ね」

咲いたばかりの桜の花弁がひとつ、春風に没され空へと舞つた。

彼にとつてこの一連の記憶は、あまり心地の良いものではない。連綿と続く平和な日常に違和感が混じりだした瞬間は、まさにその時だつたと彼は思つてゐる。違和感は自身の名前が賣す許容できぬ苛立ちとでも言えぱいいのか。

汎珠は己の名に妙なコンプレックスを抱いてゐる。

これが一体何に因しているのか説明できないのだが、これだけは汎珠の中で確かな事だつた。

何かが違う。

これは自分の名では無い。

汎珠という名は、等しくこの存在をカバーできていない。名前が指

す領域と自分とが、ずれでいるように感じてならないのだ。当たり前に彼を「こだま」と呼ぶ者がいる。けれど、彼にはどうしてもその名が自分自身を指すものだとは考えられなかつた。

これ以前の記憶で、名前に関するものは何も持つていない。特に大したひつかかりも無く、己を指す言葉が「かずらこだま」であることに何の疑問も持たずに、彼はある瞬間まで生きてきたのだ。だからその違和感は『氣のせい』だ、と彼は思つた。

たまたまだらう、と。たとえば、教師の声が初めて聞く人のものであつたからだ、とか。家族や親しい人間が呼ぶ、聞き慣れた声とは違つたからだ、とか。

少年はそう結論付け、日常に戻つた。

だが時間が経てば経つほど、この違和感は奇妙に心の奥底に降り積もり、静かに層を成して消えぬままだと知つた。一度自覚された違和感は、彼を麻痺させることをしなかつたのだ。

やがて彼は初対面の人と会話するのに苦痛を覚え始めた。徐々に拡がる滲みの様に、不明瞭な不快感が冴珠を蝕む。

あの春の日から数年後、ついに彼は自覚した。冴珠の名前を、彼自身の望むように呼べていよいのは、何も初対面の人間に限つた事ではない。父も母も姉も、身近な友人達だつて誰一人として、彼の名を呼んではいけない。

『こだま』

そう、自分に向けて声を掛けて来るように。それは間違いなく呼び掛ける人々にとつては冴珠自身を指す音なのに。

(それは、誰だ)

一体彼らは、自分の『どこ』までを捉えて呼んでいるのだろう。その『こだま』という音は自分を一体『どこ』まで区切るというのだろう。

呼び掛けられる冴珠自身だけが、違和感を抱いている。その事に気付いて、ますます彼は自分の名前にコンプレックスを抱いた。そして彼は、相手が名を呼ぶ度に失望するようになつた。

(この人も違う)  
しつくり来ない。

彼らは本当に自分の名を呼んでいるのか。  
この名は本当に自分の名前なんだろうか。

俺の名は 何というのだろう。

あまりにも馬鹿馬鹿しいと、彼自身何度も思つたか知れない。  
生まれた時に親から付けられたものだ。本当も嘘もあるか。  
けれど幾度打ち消したとしても、心は正直だった。  
違うものは違う。

何が違うのかは、わからない。

ただ、何かが違う。それだけが確かな事。

燻る違和感を飼い殺したまま、年月だけが過ぎていった。

名前は

些かささくれ立つた心で、雨戸を開けたばかりの窓の外を眺めた。水分の多い霞んだ空。晴れているのに異物を含んだ気配。朝だとうのにどこか濁つた風は空の色を隠してしまつ。

春は嫌いだ。

最近特にそう思う。

冴珠にはその原因が何なのか、呆れるほどはっきりわかつていた。大気の汚れの所為だけじゃない。

どこ中学から来た誰それです。

君はどこから来た誰なんだい？

彼が高校に入学してそろそろ一週間が経とうとしているが、毎日毎日同じ質問ばかりだ。その質問がそんなに大切な事なのか。北だろうが南だろうが隣の校区だろうが、もつと言えば海外だろうが構いやしない。冴珠はそう思つ。

同じ試験を受けて、点数でラインが引かれて、そのラインの上に名前が載つていたという事だけじゃないか。

くだらない。冴珠はそう毒吐きたい気分だつた。

階下から急かす母親の声が聞こえて、冴珠は頭を振つた。そういうする間も時計は止まらずに、秒針を巡らせ続けている。  
(行きたくないんだよ)

新たな生活の始まり。

希望に満ちた人も、不安を抱えて進む人もいるだろう。新しい環境はそれなりに未知の世界の筈だ。そしてそれは裏を返すまでもなく、初対面の人間が大勢いるということだった。ここ数日の会話の大半は自己紹介だつたんじやないかと思う。クラスの人間、特に自分の周囲に座る人々と名前を交換しておく必要はある。連絡事項もあるだろうし、名前は必要なのだ。

だがそれ以外の人間と交わした紹介の一體何割が、必要の無いもの

だつたのかと、汎珠は思わずにはいられない。多分廊下で擦れ違つて会釈する位の関係になれば上等だ。名前を知る必要も明かす必要も無く、きっと卒業までもう一度と会話の発生しない関係の人だつて相当数いるんぢやないか。

(「いつのこと、名札でも付けてやるつか）

横に大きく平仮名で読み仮名も付ければ随分楽になるだろう。その名札を翳して笑顔で言つてやる。

どつぞ宜しく

それくらいの社交辞令なら苦にならない。  
それだけで十分じやないのか。

もう一度頭を振つて目をあげる。どうにも気分が乗らない様で、思考がネガティブになつていて自覚はあつた。机の上には開きっぱなしの英語一式。昨夜片づけた予習だ。階下では少し冷めた朝食が汎珠を待つている。

こうしてまた強制的に一日が始まるのだ。

\*\*\*

「おーい、起きてるか？汎珠つてば」

「俺は目を開けたまま寝る趣味は無いけど」

見てわかんないのか、と声を掛けってきた男を振り返りもせずに汎珠は言った。声を掛けられるより以前に、この男が教室に入つて来たのはわかつていた。何かと顔の広い友人だつたから、彼が教室を覗くだけで何人かの『知り合い』と挨拶を交わしているのを、どこか遠くの出来事のように感じながら聞いていたのだ。

「何やってんだ？」

来訪者は適当に冴珠の傍の机に鞄を置いて、自分のために椅子を引く。放課後の教室は賑やかで、少し荒っぽいその音も大して人の気には留まらないようだつた。

「別に……」

特に何を見ていた、というのではない。教室の窓、そのガラス越しに外の景色をぼうつと眺めていただけだ。冴珠の席は南面の後方といふかなり良いポジションだつたから、ちょっと椅子の角度を変えただけで四階からの眺めが手に入つた。

「ああ、桜か？やつと咲いたなあ」

「……桜？」

冴珠は、言われて気付く。五分咲きの桜。校庭には幾つかの白いものが渦を描いていた。どこかに視点を定める気も無かつたから、本当に窓の外の光景を見ていただけだつた。見えたものが『何』なのがも意識していなかつたらしい。

「一年生は四階に教室があります、なんて言われてがつくり來たけど、悪くねえよな。マンションとかに住んでねえ限り、家からはこんな高さで見ることねえし」

どこか嬉しそうな聲音に、冴珠は漸く少年を振り返つた。視線の先では幼馴染の友人が、机の上に置いた鞄の上に我が物顔で寝そべつて外を見ていた。きっと、彼はその台にしている机が誰の物かも知らないだろうに。

「どうした？」

「いや」

何か用か、と冴珠は素つ氣なく続ける。

「なんか冷たい……」

「用が無いなら帰る。お前も用が無いなら帰れ」

「お前ね、それ仮にも小、中と一緒に勉学に励んできた人間に言うセリフかあ？」

「頼んだ覚えはないけど」

「ひでえ！」

「つるさいな」

彼らはいつもこんな調子だ。この少年の名前は坂本一真という。どちらかといえば正反対のイメージを持たれることが多いが、冴珠にとつて気の合う数少ない友人のひとりだった。冴珠にとつてはだからこそ、の言動だとも言える。

ハツ当たり。

冴珠は自身の言動をそう解し、ちょっと冷たくありませんかと文句を垂れる友人に、年不相応だとはとても言えないと気付いた。

「確かに、な」

呟いて、子供っぽいハツ当たりをどう誤魔化そうかと思案しかけた冴珠は、別の事に気を取られてしまった。

「……カズ、お前また背が伸びてない？」

春休みには合つていた筈の位置で目線が合わない気がする。

「俺つて成長期だもーん」

「……頭悪そうだぞ、お前がやると」

心底嫌そうな表情の冴珠に、一真はニヤリと笑つた。

「そんなこつた気にしません。冴珠がトロいんだろ」

「俺は普通だ。170はある」

対する一真はそろそろ180cmに手が届きそうなのではなかろうか。ほんの一週間で身長が目に見えて変わるのが不思議だ。

「やー、伸びる時期は人それぞれさ」

「それをお前に言わると腹が立つ。今に見てろよ」

「これはもう遺伝子レベルでしょ。オレンヂ皆でかいし」

「お前の家族が皆でかいのは知ってるけどな、そういう問題じゃないんだ」

へーだとかほーだとか妙な笑い声を漏らしていた一真は、ふと顔を改めた。

「ところでさ、なあ、放課後空いてるか？」

漸く本題か、と冴珠は友人がここへ来た訳を察する。

「……どつかに美人がいるつて？」

「なんで知つてんの」

「お前、美人と聞けばどこへでも、だろ」

失礼な、と憤慨するのかと思ひきや、一真はうんうんと肯いた。

「駅前のカフュ・ブランシユのウェイトレスなんだよ～！」

「カフュ・ブランシユ？ ああ…姉ちゃんも時々学校帰りに寄つたつて言つてたつけ。あそこのシュークリームは確かに美味かつたけど。つーか、ひとりで行つて来いよ」

「怪しいだろ？ オレがひとりでシュークリーム食つてたら」  
冴珠は180近くある学生服の男がシュークリームを頬張りつつ、目当てのウェイトレスをちらちらと盗み見している姿を想像し、口を掌で覆つた。

「自意識過剰…じゃないな。大真面目な顔で言つて事は、怪しいつて自覚はある訳だ。ひとりで行く勇気が無いんだな。要するに…」「あ、お前勘違いしてるな！ オレみたいなステキな男の子がひとりでシュークリームを…」

「前言撤回。自意識超過剰だ。何だその『ステキな男の子』って。鳥肌立つぞ！」

「…まあ…怪しまれるかもしないってのは微かに、ほんの微かに、だぞ？ 思つけどな、大外れだ。タテマエなんだよ。これはな、ほつときやカサカサに干からびちまつお前のことを想つて誘つてるんだよ」

そりやどーも、と冴珠が呟いて首を回すと右も左も口キ口キと鳴つた。

「…」の間…入学式の後、母さんとブランシユに入つたらい。いたんだよ。大学生かな。高校生かもしないけど…「」の近辺だとバイト許可してる高校つてどこだっけ

「知らん。この学校は原則禁止だと知つてれば十分だ。つーか、お前、川名先輩はどうしたんだ。春休みにメアド交換して貰えたつて言つてなかつたつけ？」

「聞いてくれるな。オレは新しい恋を探すんだ。そのための第一歩

だ。毎日課題漬けじや、いくらピチピチの高校生だつて枯れちまう。生活にはもつと潤いが必要だと思わね？」

「お前がピチピチ言うな」

胡乱な眼差しを向けつつ、汎珠だつて入学式も済ましていない春休みの内から大量に出された課題にうんざりしたのは事実だった。彼ら姉から「半端じやない課題が最初から出るから覚悟しとけ」と脅されある程度予測していたとは言え、そろそろ息抜きが欲しい。

「いいよ、行こう。お前が不審者にならないよう協力してやる代わりに、コーヒー奢れ」

汎珠の提案にう、つと詰まつた一真は、それでもめげなかつた。

「一杯だけだ。お代わり自由のミスドじやねえんだから」

三杯、四杯と飲まれでもしたら高校生の財布の中身は消えてしまいかねない。

「商談成立。じゃあノート出して来るから」

机の上に無造作に置かれていたルーズリーフを一枚手にとつて、汎珠は立ち上がる。多分返却された数学の小テストの解き直しだつた。ホーッとした顔で一真は手を振る。

汎珠はかなりのコーヒー大好き人間だ。以前一真が嗜好品としての価値を無視した飲み方だと指摘したが、その時はさらつと無視された。ちなみに一真の知る最高記録は一日に12杯だが、汎珠はあまり自分を語るということをしないので、実際の最高記録はどうなか定かではない。

一真が思うに汎珠の場合、コーヒー好きを通り越してカフェイン中毒だ。

「あいつ、よく胃に穴空かないよな」

余計なお世話だと眉一つ動かさずに咳く姿が目の前に浮かんだ。

一真は汎珠を『かわったヤツ』だと思つてゐる。

小学生の頃から汎珠の事を知つてゐるが、初めて思ったのはいつだつたか。

昔から汎珠は一真の周りの人間に比べ、妙に落ち着いた雰囲気を持つていた。浮世離れしているというのだろうか。人生を達観する、とまで言つてしまふのは大袈裟にしても、いつもどこか周りの人間とは離れたポジションにいた。

友人たちと騒いでそれなりに楽しんではいるが、ハメを外した所など見たことが無い。

輪に入つてゐるのに、馴染み切らない。

かといつて社交性が無い訳ではないから、疎外される事もなかつた。じゃあ控えめで、平凡な子供だったのかというと、きっと誰もが首を振るだらう。

けして目立たなかつた訳ではなく、むしろ独特の雰囲気は人目に止るものだつた。

『何だか良くわからないけど、こいつはちょっと違つから一目置いてるんだ』

今思えば、周囲の人間　　主に男子は、汎珠に對してそんな扱い方をしていた気がする。

その様子を見ていた小学生時代の女子達は「こだま君つて大人っぽいよね」と評してゐた。

奇妙なズレ。

ずれでいるのは確かだが、何がずれでいるのか、その原因が何なのかも良く判らない。

その良くわからない『何か』が何故か心地良く、一真是いつの間にか汎珠とつるむようになつた。

「かわったヤツだよなあ」

「誰が？」

窓にうつすらと映る少年が不機嫌そうに顔を顰めている。一真は苦笑いしながらガラスを指差した。実を言つと一真は声を掛けられるまで冴珠の事に気付かなかつた。時々 彼は気配が無い。「失礼なヤツ。俺から見ればお前の方が変わつてるね」「オレはまともだろ？」

「美人だからつて、イチイチ見に行くのが？まとも？」

「お前みたいなのは不健康だ。アツサリし過ぎ」

「失礼な。理想が高いというんだよ。お前みたいにがつつけんな煩惱に恵まれて無いもんでね」

「そこまでいうか？フツー……。黙つてりやいいのに口を開くと飛び出す毒舌、なんとかしろよ」

「お前に言われる筋合はないよ。それより行くの？行かないのか？はつきりしろよ」

「行くに決まつてるだろ！お前を待つてやつたんだぞ」日常的に繰り返される会話でじやれ合つて、昇降口に通ずる階段を降りる。重いガラスの扉を押し開けた瞬間。

音を立てて体に叩き付けられた、かすかな冷気を孕む突風。

旋風は校庭の砂を巻き込み、舞い上がらせる。

「春の嵐だな……」

砂塵から反射的に目を庇いつつ冴珠の声に頷いた一真は、砂に震んだ校庭を透かし見ながら、昔母に手を引かれて通つた桜並木の下を思い出していた。

「春は祈りの季節なのよ」

母は特別な事のように、空を見上げながら教えてくれた。一真も倣つて見上げれば、空は黄色い濁りで彩られていた。

「あれは何？」

指差した先の空を見て母は笑う。あれは黄砂よ。春の印、と言つた。

「ウサつて何？あんまり美味しくなさそうだよ。にじつてゐる」

「黄砂はね、遠い中国つていう國の方から、海の上を越えて運ばれ

てぐる砂漠の砂よ。黄色い砂なの

「ここ今までずっと、空の色も変えりゃうなんて、すごいね

「風が運んで来るの。カズくんは 真っ青な空の方が好き?」

「うん。キレイだもん」

「そつか。でもね、それでもこの黄色い砂と風が…春が来た証拠な  
のよ」

春。

その時は春がどういう季節なのか実感していなかつたけれど、今な  
ら一真にもわかる。

人々にとって春は、再生の願いが込められた季節だ。幾千年と繰り  
返される喰みの中、春は生きとし生けるものにとつての期待だ。生  
命の息吹がこの世を満たす季節だ。冬の寒さや厳しさを一気に持ち  
去つてゆく風。人々はその強さの中に、春の到来を感じ取るのだ。  
あの凍えた、辛い冬は終わつたのだ、と。

「春が来た…んだなあ」

ガラにもなく感傷的な気分になつたのは、今の一真にも、その『再  
生の願い』や『新たな出会い』への期待があるからに他ならない。  
高校生活が始まつて一週間。青臭い期待を抱いていないなんて、そ  
れこそ寂し過ぎるだろ、と思う。

校庭に背を向けて目を庇つていた一真は、吹き抜ける風の勢いが少  
し衰えたのを見計らつて、先に地面に降り立つた汎珠を振り返つた。  
「なあ…」

一真は呼び掛けようとした息を飲み込んでいた。

嵐だと呴いた汎珠は、砂塵の舞う中、目を細めるようにして空を仰  
いでいる。

何かに遮られた様に、一真の唇が言葉を拒む。

玄関口から数歩、校庭へと足を踏み入れたまま、汎珠は空を見詰め  
て動かない。

煽られた砂が埃を伴い、斬るよつた速さで二人の間をすり抜けた。  
動くものはただ風ひとつ。

他は時が止つたよつて、そこに在つた。

誰か 誰か 誰か

そうやつて壁を叩き続ける人は  
その壁が叩き壊された後の世界に何かしらの希望を持つている

\*\*\*

ある時 多分小学校の四年生位の頃のことだ。汎珠ひだまは母親に何故  
こんな名前にしたの、と訊ねたことがあった。母はいい名前でしょ、  
と直漫げに応えた。

汎珠。

確かに綺麗だとは思う。字面だけ見れば、汎えた宝石。

彼女は綺麗な心を持つた人、という意味を込めたのだと言った。

あの時、自分はどう訊ねたのだろう。

「どうして僕の名前は『汎珠』なの?」

だつたろうか。

(いや…違う)

「どうして僕は『汎珠』になったの?」

確かに、そう訊いた。夕飯時、丁度ニュースで新生児の名前の話が出  
たのだ。この機会を逃してなるものかと、口の中がカラカラになる  
ほど覚悟をして、訊ねたのを覚えている。

覚悟は、結果から言えればし損だった。

汎と珠という字を、男の名前に当てるには少し迷つたんだがな、と言つたのは父。それもそうかもしれない思った。どちらも同じクラスの女子の名前に使われていた。

「気になるか？ちょっと読みにくいしな」「知らない人からサシユちゃん、って呼ばれたことはあるけど……どうだらう……」

（女の子みたまう字が使つてあるから、気になる……のかな）大根の漬物を咀嚼する度に、頭の奥でボリボリと音が響く。何か、違う気がした。

（読み難いとかじやなくて）

自分の質問の意図が正確に伝わっていない。

だが、どう訊けば伝わるのか、伝えられるのが汎珠にはわからなかつた。

何故、自分は『汎珠』と呼ばれるようになつたのか。

そうとしか、訊き様が無かつたのだ。それに対して『綺麗な心を持つ人になつて欲しかつたから』と言われれば、そこまでだつた。（そういう事を訊きたいんじやなくて……）

上手く疑問を伝えられないまま、結局汎珠はそこで引き下がつた。

今なら、もう少しマシな訊き方が出来るだろつか。

女の子の様な字を使ってあると言われたつて、それは別に構わない。今時の子供の名前なんて、どつちがどつちなか判らない、一見しても男女の区別の付かない名前なんて山ほどある。万葉仮名ならぬ平成仮名だ。友人の「坂本一真」の様に、すんなりと「サカモトカズマ」なんて読める方が珍しい気がするくらいだ。クラスに三十人いたら、半分以上は当て字なんて事はザラにあるのだから。字の所為なんかじやないよ。

訊きたいのは、名前に籠めた『願い』や『想い』の話じやないんだ。

\*\*\*

「さつき水、運んでくれたオネーサンも良かつたけど、あの子じゃないんだよな」

「……今日入ってるのか？」

「確信犯的に会うのも良いけど、会えるかどうかのスリルを楽しむのも良くね？」

「知らないって、言つても良いんだぞ。むしろ一度接客を受けただけの人間の勤務状態を把握してるのが恐いから」

店内はそこそこ客が入つていたが、ちらほらと空席のテーブルもある。冴珠達のように学校帰りのグループも数組。『ファーストフード店より若干敷居は高めだが、何かあれば利用する店』と冴珠は姉から聞いたことがある。『何か』は大抵、試験が終わつた後に仲の良い友人同士がお互いの健闘（もしくは惨敗）を労うという趣旨で要はテストの打ち上げだ。

二人の目の前には水と氷で満たされた二つのグラスが置かれている。水を持つててくれた店員に一人はそれぞれシュークリームとアメリカンを注文した。

冴珠は店員に気を取られてきょろきょろと拳動不審な友人を観察しながら、放置した。何とはなしに耳を澄ませばそれぞれが好き勝手に内輪の話に興じている。

暫くして、一真が捻つていた身体をテーブルと平行に戻し、がつくりと肩を落とした。

「カズ、それは何だと思う？」

「は？」

冴珠は一真の手元にある、半分ほどに減つたグラスを指差して訊ねた。

「それって、水だろ？」

「コップって言つたら間違いなのか？」

「間違いじゃねえだろ？」

一真は冷やされて汗をかいグラスを取り、中身を更に飲み込んだ。氷も一緒に飲み込んで、ガリガリと音を立てて咀嚼する。

「氷水を入れた、ガラスのコップって言つたって誰も間違いとは言わねえよ」

「じゃあ、それはどうだ、と訊かれたら?」

「うまいとか、冷たいとか言つんじゃねえの。感覚だつたら人によつて違うだらうけど」

ことり、とコップを白い机の上に戻して、一真は顔を顰めた。

「お前、何が言いたいんだよ」

「当たり前の事を確信したくなる時もあるんだ。事象や現象が先に在つて、それに言葉が貼り付けられてるつて事をさ」

「……またややこしい事を考えてんのか? あのな、そんなのは当たり前だろ? 進化の過程を考えてみろよ。バクテリアでも何でも良いや、原始的な生物が言葉を持つか? 持つてねえだろ。そつから長い時間掛けて進化してきたんだから、言葉が出来たなんてのははずつとずつと後だろ」

「わかつてゐよ、そんなことは」

「俺の勝手な推測だと99.999…9%位は『モノ』や『コト』が先だ。残りの0.000…1%はそつだなあ…」

そこで一真は机の端に置かれていたプラスチックボードに挟まれたメニコーに目をやつた。

「仮にさ『ポンピング』って言葉があつたとするだろ?」

「……お前今、絶対パンプキンプリンの所を見たな。センス無いぞ」「黙れよ。兎に角、『ポンピング』って言葉を作る。今、オレが作つた」

「良いよ、わかつたつて

「これは勝手に、しかも即興で作つたから誰が聞いたつて、タダの音だ。雑音で良いんだよ。だけど、それを偶々口にした時、もし誰かに聞き咎められて、意味を訊かれたら」

「『雑音です』で良いじゃないか。何か変な音が口から出ちやいま

した、で

「そう言えなかつたらどうすんだ。そんなふざけた雰囲気じやない場面で、何としても真面目に応えなきやいけなかつたら」

「……そんな緊迫した場面で『ポンピング』とか言つなんよ……」

「煩いつて！オレは多分必死に、その場でこの『ポンピング』に相応しい意味を考えるだろ。……マジ、何にしよう。」

「今の流れだと『意味は無い』で良いじゃん。『ポンピング』は

『何の意味もありません』』という事です、で」

一真はうーんと唸つた後で、まあ良いだろと言つた。

「こんな馬鹿な話は滅多に無い、例外中の例外だろ。言葉は後だ」

「言葉が後だつてのは俺だつてわかつて。予測や想像も出来ない、認識できない事は言葉になんかなる筈がないんだ」

「言葉には出来ねえつて事だろ？在るとは思つてないから

「そう。不可能だ」

でもさ、と沢珠は机の上で水滴を浮かべるグラスを見詰める。

「何か不思議なんだよ。モノが在つて、言葉が出来たつていうのなら、きっとそれぞのモノに名前を付けていった大昔の人たちは多分名前を付けるとか呼び方を決めるなんて意識は全然無かつたと思うけど、その『言葉』が相応しいと思つてたつて事だろ。自分達の身近にあつたり生活に必要なもの…生活道具とか、自然現象なんかから、きっと言葉になつていつた筈だ」

「なんだその、言葉が相応しいって」

「疑問を持たないつて事だ。俺達は昼に空で輝く熱を持った光を『太陽』とか『日』と呼ぶ事に反発も疑問も無いだろ。直接姿が見えなくとも、枝を揺らしたり体に感じたりした空気の流れを『風』と呼んだんだろうけど、特におかしいとは思わなかつたつて事だ。もつと、他の呼び方とか名前の方が良いんじゃないかつて話には

ならなかつた」

「なつてたら、今その言葉はねえだろ。」

沢珠は肯ぐ。

「更に言えば、言語が違つても、同じ現象を指す言葉がある事にも何の疑問も持たない。日本語では太陽は日、お日様、お天道様なんて言葉で言い表される事もあるけど、英語ではsunだ。俺は他の言語は良く知らないけど…『太陽』を表す言葉が無い言語なんて、きっと無い」

「そりや太陽がこの世にあるんだから、それを表す言葉はどうしたつて必要になつてくるつて。太陽は特に大事なものだろ。無かつたら生物は存在出来ないんだから」

「どれも正しい、つて思うじゃないか」

一真がああ？と眉を顰めた。

「冴珠くーん。日本語しゃべつてくれ。良く解からん」

「違う言葉なのに、結局は同じものを指している。でもそれを誰も疑問に思わない。英語を話す人々の間では太陽をsunって言うんですね、つて言われたら素直に「そうか」って思うだろ」

「あんなあ…思わなかつたら素直に「そうか」って思うだろ」  
sunを勝手にコーヒーなんて訳しちまつたら話が通じねえし。単語一つくらいならマグレで何とかなるにしろ」

「違うよ、日本人が他所の言葉を知つた時に「おかしい、あれは『sun』じゃなくて『日』というべきだ」とは思わないって事だよ」

「…思わねえだろ？」

「思わないよ。だから 不思議なんじゃないか」

先ほどのウエイトレスが漸く銀色のトレイにコーヒーとショークリームを載せて運んで来た。バニラの香りがふわりと漂う。二人は早速白く色付いた柔らかそうなそれに齧り付く。まぶされた粉砂糖の甘みが先ず伝わって、パリパリの皮とそれに包まれたとろりとしたカスタードクリームが口の中に広がる。

美味い。

「この話の流れからいくと、「マズイ」もんを喰った後にしか「ウマイ」って言葉は生まれなかつたって訳だ。ああ…食べる順序は逆でも良いけど」

言つてしまつてから、一真は自分の台詞が先ほどの会話の流れの延長にあるものだと気付いた。

「感覚は比較するしかないから、一つを較べて初めて不味いのか美味しいのかの判断が出来たんだろうな」

沢珠は自然について来てしまつた。

「…その後に程度を表す言葉か。「ちょっと」マズイとか、「かなり」ウマイとか」

「きっとその後で気付くんだ。「もつと」美味しいものがあるんじやないか、とか。勿論その逆も。食べた事がなても、程度の問題なら推測できる」

「経験が無くても予測ができるもの、か。言葉が先に在つてもおかしくないタイプだな」

ちよつと・かなり・もつと これらの「程度」を表す言葉を持たなかつた大昔の人はさぞかしモヤモヤしただろ。そのモヤモヤ感を払拭するために、それらの感覚を言い表す相応しい言葉を作つたのだとすれば、案外言葉が先に出来る事もあるのかもしれないと思は思つた。

「そうだ。そして 予測や想像も出来ない、認識できない事は言

葉になんかなる筈がない」

（そう来たか）

冴珠はその台詞を真顔でもう一度繰り返し、一真はそれに緩い笑みを浮かべてみせた。

「で、さつきからお前はその不可能な事の何に、そんなに引っかかるんの？」

こんなに美味しいショーケースを頬張りながら、一体何の話をしてるんだろう。ややこしい事を考えながら食べるより、味わって食べるのが礼儀だら、と一真は思う。

だが、そう思いながらも冴珠に付き合ってしまったのは、ショーケースと話題を天秤にかけた結果、結局は一真自身話の続きを気になつて仕方が無かつたという事なのだが。

（不本意だ。ショーケースに失礼だ）

「お前は　自分の名前が『坂本一真』である事に疑問を持つか」  
真面目な顔をして問い合わせる友人に一真が少し苛立つたのも事実だつた。

「持たねーよ」

「何故？」

「……それは俺の台詞だつての」

「基本的に先に『モノ』がなければ『言葉』も無いんだろ。少し拡大して、想像できる範囲なら『モノ』や『コト』を想定して言葉が出来てもおかしくない」

「そうだよな？」と冴珠はひとつひとつを確認するよつこ机の端をトントンと指先で叩く。

ちゃんと味わつて食べてんのか、と問い合わせたいのを堪え、そつだろうよと一真はいい加減に頷いた。

「想像出来ないものが言葉になる筈も無い。なら　どうして、無限にある音と文字の組み合わせからお前の両親は『一真』って名前を選んだんだ？」

「そこ、話が飛んでねえ？」

「俺にとつては飛躍しない」

あー待て、と頭を振つて一真は「一ヒー」に口を付けた。

「……お前が言いたい事つて『ひとりひとりの真実を見極められる  
ように』って『』つていう名前の由来的な意味じやねえよな？」

「違うね」

「オレつていう『モノ』が先に存在して、それに相応しい名前が付  
いてる筈だつて言いたいの？もしかして」

「そう。同じような意味を表すなら、考えたら別の名前でだつて表  
現できるだろ？ぶっちゃけ別に『真一』<sup>シンイチ</sup>でも良いじやないか。それ  
とも『一真』という漢字で「イッシン」やら「カズマサ」は駄目な  
のか？何故？お前は『カズマ』になつたんだろ？」

「……さあ？」

「どうしてお前はそれを疑問に思わないんだろ？」

「ちょっと待て。自分の名前が何か途轍もない偶然で決まつたつて  
のは了解すつけどな、そこで疑問持つたつてどうしようも無いだろ  
？」

「どうして。もつと相応しい名前があつたかもしれないのについて、  
お前は考へないんだな」

「ねえよ。芸名やH・N・じゃあるまいし。今の話の流れからいけ  
ば、人の名前は後者だろ。拡大バージョンの方。想定やら希望なん  
だよ。人の名前が先に在つたつて何も変わらんだろ」

ふうん…と冴珠は呟いて、一口残つていたショークリームの欠片を  
口に放り込む。長い付き合いで、一真には冴珠がこれっぽっちも納  
得していながら見て取れた。

（おまえ、ホントに味わつて喰つてんのか！）

会話にストップ掛けてやろうか、と思いながらも一真の口から出で  
きたのは、割と弱つた声音だつた。どうやら深刻そうな雰囲気なの  
に、冴珠の話の終着点がさっぱり見えない所為だ。

「あのお…相応しいって、何なんだよ」

「だから言つただろ。その名前を呼ばれて、疑問を持つか持たない

が、だよ」

「呼ばれて疑問を持つたら、相応しくねえって訳？」

「そうだろ。太陽を太陽と呼んで疑問を持つのか？持たないだろ」「ちら、と確認するように冴珠は一真を見た。

「それとこれとは話が違うんじゃねーの？太陽に心なんて無いし、万が一そんな突拍子も無い事があつたとしても、その言葉を人間如きが理解するのは不可能だ。『そんな名前で呼ぶな』なんて文句言つてもわからんねえよ」

ああ、そうだなと言いながら、冴珠はシュークリームのプレートに載せられた付け合せのバニラアイスクリームを掬つた。

「納得しない訳？自分の名前に。お前という『モノ』の存在に貼られた『名前』に、疑問を持つてるつて事？」

「……そういうことになるね」

明後日の方を見たままそつ返した友人に、一真は大きく息を吐き出した。

「そういうことってなあ…おばさん達にとつての、『我が子への願い』を名前にしただけだろ」

「希望や願いを籠めたにしろ、何故その『音』や『文字』を選び出したのか、だよ。お前も言つたじやないか。『途轍もない偶然で決まつた』って。親は俺の何を見て、この名前にしたのかが俺にはさっぱりわからない。」

「じゃあ、お前は何て呼ばれれば納得するんだよ」

（不毛だ）

半ば投げ遣りな口調で一真は言つた。目の前の冴珠はじつと、鈍く光るスプーンの先を見詰めている。

「それがわからないから……確認してるんだよ」

『モノ』にはそれに相応しい名前が当てはめられている。『モノ』や『コト』から想像されない言葉は生まれない。（なら……）

自分という赤子を見て、名前を考えようとした時に、何かしらのイ

ンスピレーションが働かなければ、無限にある音や文字の組み合わせから『冴珠』という名を選ばなかつたのではないのか。それなのに、どうして名前を呼ばれる度に自分の名前でないような気がするのだろう。

名前を呼ばれる度に、何かが足りないような気がするのだろう。冴珠は目の前でコーヒーを啜る男を見た。彼は 坂本一真は、自分の名前が「一真」であることに何の疑問も持つていないので。それは誰かに

「一真」

と呼ばれれば、自分という『モノ』全てを「呼ばれた」と感じるという事なのだろう。

（でも俺は）

「冴珠」と呼ばれても「じい」まで呼ばれているのかわからない。その名前は確かに冴珠の身体を振り向かせる力を持ってはいるが、心まで届いてはいない。心は 呼ばれる度に違和感を覚えている。（俺は……なんでこんなに寂しいんだろう……）

誰か 誰か 誰か

叩き続けた壁がついに崩れたとしても

壁の外の世界は、その穴を覗き込む瞬間までただの想像に過ぎない

喫茶店を出て電車に乗り込み、最寄りの駅を出たところで寄る所があるからと断つて、冴珠は一真と別れた。

冴珠は雑踏の中を歩く。五時半を過ぎ、駅の周辺では学生とサラリーマンの姿が入り混じりだしていた。

寄る所があるなんて嘘だ。

早く、ひとりになりたかった。

校庭に出て空を仰いだ途端湧き出した「足りない」という感覚。この季節になると特に感じる「名前」に対する違和感だけでなく、もつと重大なもの。自分を構成する核ともいいくべきものが無いという焦燥感。

それはいつの頃からか冴珠の心の隅で、こつそりと飼われている魔物だ。この魔物は普段微かな気配しかないので、時折大きく成長して冴珠の精神を支配する。

お前には大事なものが足りないんだよ

薄黒い魔物はそう、冴珠を唆す。

俯いた冴珠の唇から自然に笑みが漏れた。何かが足りないなんて、小さな子供が駄々を捏ねているようだ。「足りないもの」が在る所

為で苛立つているのか。それとも「足りない」と思つてしまつから、現状に満たされずに苛立つのか。前者であれば本当に何か「足りないもの」があるし、後者であれば「足りている」のに満足出来ていない欲求不満状態だ。

（……違う。「足りない」と思つ」と血体に苛立つてゐるんだ）

欠けた部分があるのなら補えばいいじゃないか。

こんな気持ちを知らなかつた頃の自分に戻ればいい。

何も感じていなかつた頃と、今とではきっと何かが違う筈だ。変わつてしまつた「何か」を元在つた場所へ戻せば良い。こんな簡単なこと誰でも知つてゐるのではないか。

（何を当て嵌めればいい？）

パズルだ。わからなければ片つ端から試してみればいい。数学の公式と同じじゃないか。

それなのに、無い。

当て嵌めるべきものが、どこにも無い。以前の自分と、「足りない」と感じる今の自分の違いは何だ。そう自身に問い合わせた所で、冴珠はいつも行き止まる。

何に、飢えている？

満たされないのは何故だ。

（苦しい）

手段はわかるのに、要素がわからない。  
結局何も変わらない。

それが、冴珠の苛立ちを生んでいる。

足早に繁華街を抜けると、冷たい風が斬り付けてきた。

頼りない街灯が、日の落ちたかけた歩道にポツポツと浮かんでいる。

\*\*\*

冴珠の様子がおかしい。

ここ数日、一真はそう思っていた。『名前』や『言葉』について、妙にややこしい会話をした日から、特に酷いかもしない。

あの日、校庭で五分咲きの桜を見上げていた冴珠。

一真が振り返った先の霞んだ春景色。その春の中に不自然なほど溶け込んだ人間がいた。溶け込む、よりは同化しようと思い詰めた、かもしだれない。

哀しい、寂しい姿だ。

埋まる筈の無い溝を、埋められるのだと言い聞かせているような。その言葉は自分を欺くための詭弁だと本能的に知つてしまつているような。

実を言えば、一真はそんな光景を何度も見たことがあった。忘れた頃に不意に目の前で繰り返される情景に、一真はいつも掛ける言葉を見失う。

だが、今回は毎年恒例の『冴珠の落ち込み周期』がやつて來た、では済ませられない気がしていた。この数日の間に、一真はぼうっとしているかと思えば、思い詰めたかのように虚空を睨み付けている冴珠の姿を何度も見かけた。

（なんだあれ）

元々冴珠は「かわった」奴だが、付き合いの長い一真ですら短期間でこれほど鈍と鋭に大きく振れる冴珠を見た事はなかつた。その雰囲気の落差に首を傾げたくなる。

もつとも、その変調に気付くのは一真のように彼と極親しい者だけのようだつた。当たり障りの無い人間に対して何の障害も出ていないのは、まだ新学期になってから日が浅いというのもあるだろう。通常の冴珠の様子というそもそもの判断基準が周囲の人間の中にまだ備わっていない。

それでも見かねた一真はどうしたのかと尋ねたが、冴珠から要領の良い応えは返らなかつた。

「だるい気はするけど、大した事じゃない。多分花粉症の…アレル

ギーを抑える薬の所為だろ」

「眠くなるようなヤツ飲んでんのかよ」

「…多分」

(じばらくほつとくか)

多分冴珠自身は、はつきりと自分が変だと自覚していないのだ。自覚もしていないので、どうしたと訊かれても戸惑うばかりだろう。それに どうせ、すぐに元に戻る。大抵そうだ。こっちが心配しているのも、冴珠はいつの間にか自分で解決してしまうのだ。ケロッとした顔で「そんなことあつたか？」と馬鹿にされるのがオチだ。今回も一週間もすれば何事も無かつたように元に戻るだろう。

今までの経験からそう判断し、一真は見ない振りを決め込むことにした。

ところがその数日後、一真は自分の読みの浅さを知ることになる。新入生のための部活動紹介も有つたが、結局どこに入部するのか

中学ではバスケ部に所属していたが、そもそも高校で部活をするのかどうかすら未だ決めていない一真は、S・H・R・を終えるとさつさと帰り支度を始めた。ホームルームが少し長引いた所為で、終わつた途端廊下で待ち構えていた他所のクラスの訪問者が雪崩込んで来る。放課後の教室に溢れる声。その中の聞き慣れた声のひとつが、不意に一真の耳に飛び込んで来た。

「葛くん、この頃元気無いね

一真は思わず肩を揺らした。

「そうなの？元々割と物静かなタイプじゃん

「ただけどさ、中学の時となんか違う。あ、ねえ坂本！どう思つ

？」

「どうつて……？」

教室の離れた所から突如飛び火した会話の切れ端に、一真は言葉に詰まってしまった。振り向いた先には同じ中学校出身の女性徒が三人、机を取り囲んで何かの教科のノートを広げていた。

「坂本、昔から仲良いじゃん。うちのクラスにだつて時々来てるし、話もしてるでしょ」

彼女達は高校に入つてから面識の出来た者と違い、以前の冴珠を少なからず知つている。声を掛けてきた少女は一真と一度委員会で一緒になつて以来、世間話をする間柄だ。

だが、冴珠と彼女はそれほど親しかつたといつ印象は一真には無い。二人は『一真を通しての知り合い』という関係だつたと思うのだが、その浅い付き合いの人間にまで冴珠は変調を悟られているのだろうか。

何か胸の奥がもやつとしたものに包まれるのを一真は感じていた。

「……そういうや島田さんも三組だつけ」

「そう。三組はあたしと、葛くんだけだよ。北中出身なのは」

「で、どうなの？ 葛くん、調子悪いの？」

気遣うというよりは世間話の延長のような彼女らの雰囲気に、一真は一瞬迷つた後、抱き上げた重い鞄を机の上に下ろした。この様子なら冴珠の様子に少し探りを入れても不審に、一真も冴珠の様子がおかしいと感じているとは思われはしないだろ？

「あいつ、調子悪いの？ 島田さん、クラス一緒にだつたらオレより良く判るんじゃね？」

「そうだ、元気無いってどんな感じよ。そんなに調子悪そつなの（そうそう、ナイス井上！）

一真の訊きたい内容を訊いてくれた少女に内心でエールを送る。

「調子悪いっていうかさ……」

「いつもギャーギャー騒いでる奴が元気無いならすぐわかるけどねえ……」

「うつわ、ギャーギャー騒ぐ葛くんなんて、想像つかない。ありえない」

「坂本は昔かなり、ギャーギャーだったよね」

「おーい…話、逸れてんぞー」

一真の指摘はすんなりとスルーされた。

「中学入って少しマシになつたけどさあ、

「オイ！昔の事には触れるなつついのー。オレ、高校では知的キャラで行く予定……」

「無理無理」

「本質は変わらないよ、坂本」

憐れみすらを含んだ視線に、分が悪いのは一真だった。彼女には小学生の頃…つまりは『ギヤー・ギヤー』だった（自覚は勿論ある）過去を知られている。

「オレの話は置いといてさあ……今、冴珠の話じゃなかつたつけ」出来るだけ弱つた声で一真是そう言い、椅子にがっくりと座り込んだ。半分演技で半分本気だ。

あ、そーだ。そうだった、といつ井上の声が色々な意味でありがたい。

あくまで自然に。あからさまに冴珠の様子を訊ねたくはない。そう考えていた一真だが、この流れなら過去を思い知られるのが嫌で、話題転換した事になるだろ？

傷口をこれ以上拡げたくもないし一石二鳥だ、とかなり前向きに一真は己に言い聞かせた。

「で、結局どうなのよ。葛くんは」

「ん 元気無いつていうか……どこがつて言われると困るんだけど。表情が、雰囲気が……切羽詰まってる、つていうのかな。大事なテストでさ、後十分しかないのに終わんないつてトコ。どうしても解けない問題があつて、しかもソイツをクリアしないとどこにも進めない……みたいな？」

「うつわ、それ結構深刻じゃない？」

「止めてよ、入試の時の恐怖思い出すからー。」

「坂本、一番親しいでしょ？どうしたのかと思つて」

向けられた島田の視線に、一真是顔が引き攣るのがわかつた。

（取り敢えず、笑顔だ）

一真是動搖しつつもすつとぼけた。本能的に誤魔化した方が良い気

がしたからだが、それ以外に方法が無かつたともいう。

「オレには良くわかんねーけど……」

冴珠はそう簡単に『知り合い』ぐらいの他人に異変を悟られるタイプではない筈だ。

（一体何やつてんだアイツ）

「今度それとなく聞いたくわ。あ、でも確か花粉症でどうのこうの言つてたな」

「え、調子悪いのつて、マジそんな理由？」

「よつほど辛いんかな。薬、合わなかつたとか？」

「まあでも、花粉症だつてんなら安心じやん」

（……オレは何とも言つてねーけど）

勝手に解釈したのは彼女達だ。

じゃ、オレ帰るわと一真は立ち上がり、

「あ、今のことあいつに言わないでね」

取り敢えず釘を刺しておく。そうでないと冴珠に知れてしまつた場合、何故か後が怖い。勝手な事言つなと躊躇を曲げられそうな予感がする。

彼女らの了解を得て、一真はひらひらと笑顔で手を振つた。教室に背を向けた一真は、笑つてなどいられなかつた。

（……何やつてんだよ、冴珠）

多分もうそこにはいないと知りつつ、三組へ足を向ける。案の定、覗き込んだ箱の中には冴珠の姿も鞄も無かつた。冴珠だけではない。珍しい事に、三組には誰も残つていなかつた。多少雑然と並んだ机と椅子。黒板、教壇、後ろに備え付けられた棚。それぞれクラス毎に微妙に雰囲気は異なるが、どこにでもある教室の風景には違ひない。

違わない筈の、箱。

しん…とした空間で、黒板の上に掲げられた丸い白盤だけが控えめな音を刻む。

すぐ隣の教室や、グラウンドからは人の声が聞こえてくるのに、こ

こは何かの隙間に様に音を取り上げられている。

「あー：失礼シマシタ」

開けてはいけないドアを開けてしまった気分になって、一真は決まり悪そうに、誰もいない教室に向けてそう呟いた。

帰り道も、帰宅してからも、一真はずつと汎珠の事を考えていた。その事実に気付き、げんなりする。何でヤローの事をこんなにじっくり考えなきやならんのだと思つと癪なのだが、一日廻り出した思考にはキリが無い。

一真の知る葛汎珠という人間は少々のことで動じたり、それを付き合いの浅い他人に晒すような真似をしようとするタイプではなかつた。一番親しい友人と見做される（汎珠本人がどう思つているのかは別としてだが）事の多い一真の目には、そう映つていた。

それが。

『葛くん、この頃元気無いね』

確かに、一真も何かおかしいとは思つていたが、それは一真が汎珠と極親しい間柄だから感知出来たのだ、と思っていたのに。

（……珍しいんだよな、こういうことつて）

『どうしても解けない問題があつて、しかもソイツをクリアしないとどこにも進めない……みたいな？』

多分、島田の表現は的を射ている。

比較にならないのは問題の大きさだ。汎珠は仮にテストで彼女と同じ状況に陥つたとしても、溜息ひとつで済ますような奴だ。（そうなんねーのは……）

一真は机の上に広げた課題のプリントを俯瞰する。

スタンドの白い光が数字の羅列を照らし出していた。三分の一までは埋まつてゐるが、頭を半分以上ここ最近の汎珠の様子や何かに使ひながら眺めていると、ただの模様に成り果てるのが先か、解き切るのが先かは微妙だ。

課題は明日の一限の数1の授業がタイムリミット。

この課題の中に解けない問題があつても、一真はそう深刻にはならないだろ？もし解けなかつたら参考書でも何でも見て、解く努力

はする。テストなら時間を最後まで使って足搔いて解こうとするだろ？が、それはそれ。悔しかろ？が、出来なかつたものは仕方ない。次だ、次。

(それはアイツも一緒にやねーの？)  
じゃあ、何故。

一真はシャーペンでこめかみを数回ノックした。

(そうなんねーのは)

多分彼にとつて、今抱えている問題がそれ程大きなものなのだ。毎年、春になるとどうも冴珠が不安定になるのを一真是感じ取つて、面と向かつて指摘をしたことはなかつたし、大体数週間もすればその不安定さはすっかり鳴りを潜めるから、一真是「ああ、またか」と大して気にもしていなかつたが、今年は一味違うらしい。『当たり前の事を確信したくなる時もあるんだ』

あの日の、ややこしい会話。

どうもあれが気になる。

(何が、何だつて？)

『お前という『モノ』の存在に貼られた『名前』に、疑問を持つてるつて事？』

ありえねーだろ。そう思いながら一真が口にした台詞だつたのに。

『……そういうことになるね』

すんなりと肯かれて対処に困つたのは記憶に新しい。

(名前、ねえ)

島田の言葉を借りるなら、彼は『自分の名前』に対する疑問が解けなくて、『ソイツをクリアしないとどこにも進めない』状態に陥つてゐるから、変なのだらうか。

(切羽詰まつてゐる……か)

島田の見解は鋭いと一真是思う。いつになく鈍と鋭に振れる空気。それは確かに、何かのストレスに困るものだと言われば納得できた。そのストレスの原因はおそらくあの日の会話の中に現れた『名前』なのだらう。

『モノ』にはそれに相応しい名前が当て嵌められている。

冴珠の真剣な声が蘇つて、一真は思わず頭を搔き鬯つた。

（そんな事言われたってなあ。大体何だよ、疑問を持たないって…）

…自分の名前だろ？それ以外無いだろーが）

冴珠はいつも名前を呼ばれる度に、疑問を感じていたのだろうか。疑問を持つのは、相応しくないからだという意味で、冴珠は話していた。

（…おい）

冴珠は呼びかけられても、それは自分の名前ではないと思つていたのだろうか。

何度も何度も。

名前を聞く度に湧き上がる違和感に折り合いを付けて、返事をするという生活を続けてきたというのか。

（……）

一真の背中が、すつと冷えた。

『それがわからないから……確認してるんだよ』

寂しそうな、諦めたいのに諦めきれない未練のようなものを、滲ませた声。窓の外に向けた視線の色は、校庭を振り返った時と同じまま。

（何だよ、それ）

誰にも言わずに？

誰にも悟られずに？

本当は自分の名前じゃないと思いながら、何百、何千回と呼ばれる声に応えて来た？

一真は右手のシャーペンを乱暴にペンケースに突っ込んで、立ち上がった。同時に左手はスタンドのスイッチに触れ、ふつと視界に満ちる光量が減る。

首と肩をぐるぐると回し、びさりとベッドに寝転がった。見上げた先の天井で輝く蛍光灯が邪魔だったが、そのまま一真は瞼を堅く閉じる。

閉じた瞼の裏で、赤や黄色の丸い模様が動き回っている。

『仕方ないだろ……』

ふ、と耳の奥で随分昔に聞いた汎珠の台詞が蘇つた。今思えば、あの日と同じ聲音だった気がする。諦めの奥底に、隠し切れない何かを秘めた声。

（何がしゃーない……あ）

そういうえば、昔何かなかつただろうか。汎珠が『仕方がない』と言つたのは、何についてだつたのだろう。

あれは、いつだ。

『おまえ、何とも思つてなかつたのかよ』

多分、その時一真は怒っていた。

良く晴れた空。肌寒い風が建物と建物の間を甲高い音を上げて吹き付けてくる。

あれも、春か。

未だ春の中に冬の氣配が多分に混じつた季節だつたのではないか。（あれ、マジ何の話だつけ？ 確か結構酷いこと言われた気が……）

『一真には、関係ない』

（何が関係無かつたつて？）

『だよ』

あの時汎珠は 珍しく唇を噛んで苛立ちを露にしていた。  
思い出せない。

でも あの時も『名前』がどうのこうのと言つてこた気がするの  
は、記憶違いだらうか。

（わかんねー……）

『表情が、雰囲気が……切羽詰まつて、つていうのかな

島田の台詞を思い出し、一真は唇を引き結ぶ。

（らしくねーぞ、汎珠）

何故、切羽詰まる必要があるのか。

（出さなきやなんない答えがわかんねえ。もしくは答えの導き方が  
解らん、のどつちかの場合だろ）

それが解らなくて、その先をどうしても知らなければならない時に、人は焦りを覚えるのではないだろうか。ただ、冴珠の場合は『知らなければならぬ』という表現が合っている気がする。知りたい、ところよりも何か 齧迫的なモノを抱えているような。

（答えを知らなきやどこにも進めないつていうなら、焦るのもわかる気がするけど。知りたい内容つて……）

名前か。

何故、葛冴珠という名前で呼ばれるようになったか。  
どういう経緯で無数にある音と文字の組み合せから、その名前を選択したのか。

それから 何故自分の名前を呼ばれているのに、それが自分の名では無い様な気がするのか。

「…それってかなり不毛だろー」

思に至つた内容に一真は寝転がつたまま脱力し、音を上げた。

（そんなんで切羽詰られても、どう解决すりや良いんだよ）

全くの悪循環だ。解决法が思い浮かばないのは、冴珠も同じ。彼は既に答えの出ない疑問のループに陥っているということだ。  
無意味な呻きを吐き出し、一真は上半身で反動を付けてベッドから立ち上がった。机には向かわず、電気を消して部屋を出る。  
妙に人が恋しくなつて、階段を駆け下り明かりの点いたリビングに突入した。

キッチンの母親に階段が抜けたらどうするのと小言を食らつたが、一真はへらりと笑つて誤魔化した。ソファに座つていた弟の前に立ちはだかり、視線の先のテレビ番組を覗き込む。割と人気のクイズ番組だつた。

「カズ兄、邪魔！ 見えねーじゃん

「そうか、お兄様がもつと邪魔してやるつー。」

「あ！」

一真の台詞と共に坂本兄弟リモコン総脱戦が勃発する。

「リモコン返せ！ 勝手にチャンネル変えんなー！」

「ホレホレー悔しかつたら取つてみろー」

「いつも言つてるでしょ。お母さんが見えないから、そこで暴れるのはやめて」

対面式のキッチンから投下された母親の呆れた声。兄弟は睨み合つたが停戦には至らず、ソファに座つたまま黙言の脚立戦を繰り広げる破目になつた。

穴の向こうに広がる世界が  
たとえば

明るく美しい花園の様に見えたのなら

目の前の現実を打ち壊し

勝ち取るために彼は迷わず歩き出すだろう

だが  
穴の向こうに広がった世界が

もしも

虚無を具現化したような荒廃した風景だったら

周辺の級友たちと弁当を食べながら、一真はこっそり反省していた。昨夜の自分は、三つ年下の弟と脚合戦をした。勿論自分が弟より断然脚が長いので、蹴り合い（坂本家において脚合戦は、脚を使つて相手をソファから落とす競技である）は有利である。態々本気になるまでもない。ただ、体格で圧倒的に不利な弟が本気になつて、半泣き一步手前位になるように加減をした、という程度の気合の入れ具合だった。

正直大人気ない。

先日『ギャーギャー』だつたと評された以前の自分。

そのイメージを振り切つて、知的キャラでいきたいなー等という自らの希望は、幼馴染みの彼女らに一刀両断されたのは記憶に新しい。そして今日、廊下の騒ぎが気になつて仕方の無い自分。これは多分、一般的に『野次馬根性』とか言われるものではないだろうか。それが無意識の内に自分の体を動かしているのだ。多分。

だつて、悲しいかな女の子がキヤーキヤー言つている内容の中心に、自分が居るわけが無いと知つているのだ。何故なら、声の主は井上と秋田という現クラスメートであり、更にその二人は小学校時代からの御学友でもあつたりするのだ。

今更黄色い悲鳴を上げてくれる事なんて、あり得ない。

それこそ長い経験で、そういう位置にいるキャラクタでは無いと思は知らされているのに廊下が気になつて、一真はうずうずしている。やはりこれは『野次馬』の性なのだろう。

大人気なくて、野次馬で。

今この瞬間までの数日間の様子を自ら省みて、一真はちょっと自分将来像を危惧していた。

やつぱりオレ、一生ギャーギャーなんじやないだろ？ とか、と。

丁度その時だつた。

「坂本ツー！」

声と同時にガラツと勢い良く開いた扉の向こう 気にしてない振りをしながら氣にしていた扉が開いて、一瞬で廊下と繋がつた。

「うえ、オレ？」

柄にも無く微妙な哀愁を漂わせたりした所為だろうか。これは気紛れな神様のドツキリかもしないと、名を呼ばれてからほんの数秒間、一真は真剣にそう思つた。

扉を開け放つた声の主 井上は、頬を高潮させ目をきらきらさせている。

（マジ？ 何で、何だつづーの？）

喜ぶよりも前に、身体が逃げの姿勢を取つていても、これまでの長い経験故だ。

「モツチ？」

「…モツチつて……あ！」

その井上の後ろから、ひょいと顔を覗かせた女生徒に見覚えは無かつたが、古いあだ名に一真は声を上げた。

「凄いでしょ！ 坂本！ 美鈴だよ！ ！」

「さつき廊下でばったり会つたんだよー。」

井上・秋田コンビの声に圧倒されつつ、一真なんとなく状況を掴んだ。教室のあちこちから好奇の視線を寄せられて、一真はさり気なく廊下に移動する。

これは、アレだ。いわゆる幼馴染との感動の（かどつかは個人の判断に委ねるとして）再会だ。

「うわー、かなり久し振りじゃね？」

美鈴は小学校の卒業と同時に隣の市に引っ越ししたが、一真はそれ以来一度も彼女と会つていない。

「こつちに戻つて来てんの？」

「越境した」

「へえ」

「やるじやん、美鈴」

「皆に会えるかなーと思つて楽しみにしてたんだけどね。七組、一人も川上小の子いなくて」

「マジ？ 七組はひとりいたと思つたけど… 三笠がいなかつた？」

「三笠は川上西だから、美鈴と面識無いよ」

「あ、そつか」

秋田の言葉に井上は納得した。北中は川上小学校と川上西小学校の生徒で構成されている。

一真は改めて少女・矢野美鈴を見下ろした。昔はショートだった髪が伸びて大人っぽくなつていたが、美鈴だと言われてみれば、確かに当時の名残がくるつとした目の辺りに感じられた。昔は意識しなかつた身長差がはつきりと生じていて、びっくりする。暫く会つていなかつたから余計だらう。

「モツチ、背伸びたねー。面影無いよ。言われなかつたらわからんなかつた」

「コイツ、背だけどんどん伸びてさあ」

「井上サン、背だけつて余計…」

「中身変わつて無いよ、坂本は」

「変わつてないのかあ」

「全くな」

先日のおさりいのような会話に、一真はちよつと本気で打ちひしがれていたが、ふと表情を改めた。

（あれ…）

「他、誰がいる？」

「今年、結構川上小こるよ。シマシマヒロヒ…」

「……お前ら、メシ喰つたんか？」

「あ」

一真の台詞に三人の少女は、同じ音でそれぞれに反応した。教室の時計を覗き込むまでもない。廊下に人が増えてきているのは、皆が食事を終え出した証拠だった。

「やっぱ、七組次体育なの！放課後また来る…！」

「オッケ！うちら皆一組だから！」

走り出した背中にそれぞれに声を掛けて、三人は教室に戻った。二人はまだ何も腹に入れていらないらしい。適当に余っている椅子を引っ張つて、秋田が井上の机の上に弁当を載せる。大急ぎで弁当を広げようとしていた井上がポンつと手を打つた。

「今度時間作つて、同窓会か歓迎会やろつか」

「それいい！」

食べる手を止めないまま、秋田は大きく頷く。二人はかなりのスピードで手と口を動かし、食料を腹に納めながらも、器用に会話を続ける。

「うちの学校にいる川上の生徒の連絡先は大体わかってるけどさ、他所に行つた子らはどうする？」

「それはちょっと落ち着いてからにしたらどう？·とりあえず学校内で都合の良い子で。日も決め易いし」

「そだね。坂本！」

本日一度目の不意打ちか。自分の席で持参した弁当を平らげ、更に買い込んだハムエッグを頬張つていた一真は、一瞬咽そうになつた。

ぐるりと顔を向けると

「んじや、男子の方ヨロシク！」

「ん？」

「なにとぼけた顔してんの。男子は四人しかいないんだから、直ぐ連絡取れるでしょ」

「や、取れるけどさあ」

「曜日と時間の候補決めたら書つから、男子は回しね」

「おー……」

女子の勢いに圧倒される形で、一真は頷く。その返事を聞いて、彼女らは再び目の前の弁当をつつき出す。

一真はそれを見て、思わず呟いていた。

「……つーかさ、確かに丸聞こえなんだけどさ……あいつら、オレが会話を聞いてることを疑いもしてねーのかよ。……」「良い関係なんじやねーの？」

一部始終を見ていた、一真の前の席に座った男子は苦笑している。黄色く霞む晴れた午後の空。

窓の外を見て、一真は溜息を吐いた。

「やつぱオレ、一生ギャーギャーキャラ扱いなんか……」

放課後、三組を覗くと沢珠は丁度帰り支度を終えた所らしく、重そうな鞄を肩に担ごうとしていた。見渡した人の中に島田はいないが、鞄はまだ机の上にあった。

「よ、起きてるか？」

「……目を洗つて來い。ついでに頭も良い物と交換して貰つて來い」

「おー毒舌絶好調！起きてんな。とこりでさ、島田さんは？」

「島田さん？多分掃除当番じゃないか。あの席、三班だろ」

沢珠が顎で後ろの掲示板を示す。掃除当番表では、今週三班が職員室前の廊下掃除を担当する事になっていた。

「島田さんならもう直ぐ帰つて来るだろ。待つてれば」「や、いないなら良い。さて、沢珠君」

一真の顔を見て、沢珠は心底嫌そうな表情をする。一真は負けずに

胡散臭いと評される笑みを浮かべた。

「……なに」

「折り入つてお願いがあるんで」「やりますが」

「お前がそういう顔して、そういう声で俺を呼ぶ場合碌なことじやない。却下」

「話し聞く前から、失礼じやね？」

「過去の自分の言動を省みるよ」

「や、今度こそ奢るからさ！」

その一言で一真の言いたい事がピンと来た汎珠は、殊更げんなりとした声を選んだ。

「また……？」

「またつて一度田じやん…ブランシユに付き合つてくれ！！」

前回は粘つたが田当てのウエイトレスに会えなかつた。一真是それでも最初の約束通り汎珠に奢る心算だつたが、汎珠が「良いよ」と言つて結局割り勘になつたのだ。

「いなかつたら意味無いだろ」

「いーまーすー！調べたんだって」

自信満々の一真の声に、汎珠は半歩身を引いた。

「ついに犯罪者か…ストーカーがここに……」

「ちげーよークラスにさ、姉ちゃんがブランシユでバイトしててヤツが居たんだよ。そんで訊いて貰つたんだって」

凄くね？運命めいたもんを感じねえ？などとひとりのたまつ男に、汎珠は呆れ返る。

「俺にはどこからその思い込みと、それを実行に移す情熱が生まれてくるのか理解できないよ……」

「人間ちゃんと会つて話してみなきや、どんな奴かなんてわからんねーだろ。これは、その人間理解のための第一歩」

汎珠はチラッと半眼を向けた。

「幻滅したらどうするんだよ」

「幻滅しようが更にのめり込もうが、そりゃ結果の話だろ。実際に

会わなきや わかんねー」

「それはそうだらうけど」

「つー訳で、不審者対策に何卒ご協力をお願いします！話する前からちよつとアヤシイなんて思われたら相互理解なんてできねーだろ？頼む！」

一真は、冴珠が一真の担当の彼女を好きになつてしまふ可能性といつものを、これっぽっちも思いついていないようだつた。一緒に行くという事は、冴珠にだつて均等にチャンスを与えているのと同じだ。

更に、相手と親しくなる事で、自分が相手に幻滅される未来だつてあり得る事にも触れていない。むしろこの点については考えないよう自衛しているのかもしだれないが。

（幸せな奴）

「わかつたよ」

一真がうつしゃー！とガツツポーズを決めた。

「ほれ、行くぞー」

一真は勝手に机の上に置かれていた冴珠の鞄を取り上げ、自分の肩に担ぐとさつさと教室を出て行こうとする。彼は背は高いが、どちらかというとひょろりと伸びた（伸びている最中だと本人は言う）体型だから、両肩に大きな鞄を背負うと重心が極端に上がりつづけらしい。鞄をひとつ持つ時よりも配分は均等に近い筈だが、バランスが取れているのかいなか微妙に見えた。

「……質に取らなくても逃げないけど？って、おい！いきなり立ち止まるな」

教室と廊下の境目のドアは突然動きを止めた一真の体と一つの鞄に栓をされた。慣性の法則で鞄の底に体がぶつかりそうになつた冴珠は眉を顰める。

「あー言い忘れてたけど

「何を？」

一真が首を捻つて、顔だけで冴珠を振り返った。

「矢野さん、この学校だつたんだぜ」

「は？」

どの『矢野さん』だ？と疑問を顔に貼り付け、冴珠は一真を見上げる。視線の先の一真は珍しく真面目な顔をしていた。

「矢野さん、だよ」

立ち止まつたまま繰り返す一真に対し、冴珠は埒が明かないと判断した。

「……鞄返せ。それからドアの間で立ち止まるな。大いに邪魔

「うあつ！？」

一真の肩から冴珠は自分の重い鞄をひつたくるとほほ同時に、障害物の膝裏に脚を入れて軽く前に蹴り出した。一真の体がバランスを崩し、廊下にとどつとよろけるようにして吐き出された。転ばな

かつたのは、実は見事な反射神経のお蔭だと冴珠は知っている。

「冴珠くーん？ オレの扱い酷くない？」

「でかい団体して流れを塞き止める奴が悪い。で、誰が何だつて？」  
「酷い酷いと喚く一真に冴珠は改めて問いかけた。一真はどこか不機嫌そうな手つきで、鞄を肩から掛け直した。

「だから」

教室を背にして立っていた冴珠の右手で歓声が沸きあがり、ふと冴珠はそちらに気を取られた。一真もそちらに目を向ける。

二組と三組の間には階段があり、教室一つ分弱の距離がある。その階段付近の空間で何かあつたらしく、数人の女子がはしゃいだ様子で輪になっていた。良く見れば、その輪の中の一人に島田の姿もある。丁度掃除から帰つて来た所だったのだろうか。

「お前、島田さんに何か用があつたんじゃないのか？」

「あー、まあ」

一真がガシガシと自分の頭を搔いた。歯切れの悪い返事を不審に思い、冴珠が口を開こうとしたその時。

「あつ！」

一人の姿に気付いた島田が嬉しそうな笑顔で早く早く、といつように手招きする。

「？ 何？」

困惑しながらも冴珠は歩き出した。一緒に居るのは井上と秋田と…更に数人。島田が後ろを向いているのに気付いたのか、その視線を追いかけるようにして、輪の中の少女の一人が一人を振り返った。

「葛くん？」

小さいけれど、その声は良く響いた。目を見開いた冴珠の足が止まる。

「……矢野さん？」

良く見れば、その集団は幼馴染と言つて差し支えない人々で構成されていた。皆冴珠や一真と同じ川上小のメンバーだ。

「隣の市から、越境して来てるんだって」

後ろから一真の声が聞こえるが、振り返らずに冴珠は再び歩き出した。

「葛くん、びっくりでしょ！私、さっきイノッチからメール貰つて知つたんだけど。あ、先に坂本から聞いてた？」

「いや。あいつ、俺を驚かせよつとして黙つてたから。酷いよな」

「坂本サイテー！」

「島田さん、もつと言つてやつて」

女子からサイテー「ールを受け、一真はよろつと壁に手を着いた。ふん、とその様子に鼻を鳴らした冴珠は、矢野美鈴を振り返つた。

「びっくりした。久し振り

「ほんと、久し振りだね」

向けられた笑顔に、冴珠は柔らかく口角を上げた。

「元気そうで良かつた」

「美鈴、大人っぽくなつたでしょ。こんなに髪も伸びてさ」

井上が美鈴の肩に掛かる髪を一房指先で持ち上げて笑う。

「そつかなあ？」

「何たつて、私たちの美鈴のイメージは小六の時で止まつてるし」

「あーそつか。それにしても 葛くんも坂本くんも随分背が伸びたねえ。女の子は大人っぽくなつても面影あるけど、男の子は変わるね。凄いなあ」

感心したように見上げてくる美鈴に、冴珠は軽く肩を竦めてみせた。

「あいつ、中身は変わつてないよ」

「あはは、みんなそつ言つね。私も大して変わつてないと思つけどなあ」

「多分あたしも変わつてない」

「中身がそつそつ変わるハズが無いつて」

同意する島田や井上に頷いていた美鈴は、くるつとした黒い目を冴珠に向けてきた。

「葛くんは？」

「俺？俺も 変わつてないよ」

美鈴の唇が何かを言い掛けたが、続く冴珠の声に搔き消された。

「でも、あいつとだけは同レベルだなんて言いたくないんだけどね」

「冴珠ア！さつきから黙つて聞いてれば酷過ぎんぞ！」

「あ、間違えた。年々幼稚になってきてるから、アレよりはマシかも」

「「」一だーまッ！！」

対一真にだけ発揮される冴珠の毒舌を止める手段はこの場に一つしかなかつたようだ。

「じゃ、オレら寄るところあつから！またな！」

「あー坂本、逃げんの？」

「うつさいーー！」

一真は冴珠の鞄を掴んで、それごと冴珠を集団から引き離した。

「じゃーねー！」

見送る声に適当に返しながら、冴珠は引き摺られるよつとして階段を降りる。

「また今度美鈴の歓迎会やるから！」

階段の上から井上の声が降つて来た。

\*\*\*

運ばれてきたコーヒーの芳ばしい香りが一人の間に漂つていた。一真はソーサーの上に載せられた銀のスプーンを左手で弄んでいる。冴珠は机の上で軽くし両手を組んだまま、大通りに面した窓の外を眺めていた。

冴珠と矢野美鈴の間に何があつたのか、一真は明確に知つてゐる訳ではない。

だが一真の小六の頃の記憶では、二人は付き合つまでは至らないにしろ、良い雰囲気だったのは確かだ。

沢珠は女子のダントツの人気を得るタイプではなく、好きな男の子の名を順に挙げると三番目、四番目等にちらほらランクインするタイプだった。格別に優しいというのでもないが、誰に対しても分け隔ての無い、割と穏やかな態度。それが沢珠の人気の原因だったのだと思う。派手さは無いが、良く見れば整った顔立ちのも、一役買つていただろう。

たとえ好きな子として選ばれなくても、間違つても嫌いな男子としてブラックリストに載つてしまつような事は無いタイプだった。実を言えば、一真にはその当時から沢珠の毒舌が浴びせられていたが、それは例外だったらしい。

沢珠のクラスメイト達に対する態度は、裏を返せば、特別を作らない一步引いた態度だが、美鈴と話している時の沢珠は、普段より笑顔が多かつたと思う。一真が何と無くその事実に気付いたのは、六年の夏を迎える少し前。

沢珠が特定の女子と親しくなるなんて、珍しいなと一真は思つていた。

二月の終わりに、引越しをクラスメイトに告げた美鈴。

彼女の祖父が去年の夏に亡くなり、一人残された祖母と美鈴の家族が一緒に住む事になつたと聞いた。住み慣れた家を離れるのは祖母には負担が大きいだろうという理由で、美鈴が小学校を卒業するのを待つて、祖母の家に引越しすることになつたのだ、と。

当時、一真も沢珠や美鈴と同じクラスだったから、半泣きを隠したような彼女の笑顔を良く覚えている。

割と親しそうだった二人の関係が少しずつ、それも歪に形を変え出していたのは、実はそれよりも少し前からだった。多分、殆どの級友達は気付いていなかつただろうけど。

『沢珠くん』  
『沢珠くん』

いつの頃からか美鈴が『かずらくん』から『こだまくん』に呼び方を変えた辺りから、『何か』は始まつていた気がしてならない。

一真の動物的ともいえる勘が捉えたその変化は、卒業式を迎える頃には誰の目にも明らかになっていた。

『美鈴は告白するのかな』

『しないかも』

『離れちゃうのは寂しいから』

『無理なのかな』

漣の様な漏れ聽こえる会話たちは一人の変化を、転校が齎した「好きだけど、言わない」という、ちょっとした悲恋に仕立てようとしているらしかった。

すぐに別れがきてしまうから

好きだと言つたら、辛いから

気付かない振りで、友達の関係を続けよう

『仕方ないだろ……』

風が吹き消しそうになつた、冴珠の小さな声。

あれは卒業式の後の、美鈴や私立へ進学を決めたクラスメイトとのお別れ会の後のことだ。一真は美鈴に対しだだの友達のよう振舞う冴珠に、腹を立てていた。どうして何も言わないのか理解できなかつた。

傍から見ていれば、冴珠も美鈴もお互い相手に好意を持つているのは明らかな事のようだ。何故気付かない振りをする必要があるというのだろう。

『言えれば良いじゃないか。続くか続かないかなんて、やつてみなきやわからぬい筈だろ』

一真はそう言つて詰つた。目を伏せた冴珠。びっくりするほど静かな声で『関係ない』と言われたのには、実を言つとかなりショックを受けた。

誰かの叫びのような風の音が辺りを切り裂く。

『仕方ないだろ……』

風に紛れそうになつた諦めの言葉。

(でも、あれは)

好きだけど、離れてしまうから

あの時はそういう意味だと疑いもしなかつたが……。

「冴珠」

「……何」

視線を一真に向けないまま、冴珠はパンプキンプリンを一匙掬つた。

「下世話な事、訊くけど」

「下世話と判つてゐなら、最初から訊くな

「だつて気になるし？」

一真是にやつと人の悪い笑みを浮かべて言つた。この程度の切り返しで黙つてしまつようなら冴珠とは付き合えないと一真是十二分に知つてゐる。冴珠が何とか言う前に、一真是質問を向けるという先手を打つた。

「何で、振つたの」

冴珠はやつと一真の方へ目を向けた。黒々とした瞳はここ数日の不調を引き摺り、どこか虚ろな色をしている。

「主語も目的語も無いな。高校生の質問の仕方かよ」

「へー？入れちゃつて良いわけ？」

冴珠は溜息を吐いて、プリンの乗つたスプーンを力チャリと器に戻した。

（あ、仕掛け方マズッたかも）

一真是思わず肩に力を込めて身構えた。これは物凄く怒るか、ぐさぐさと静かな言葉で返り討ちにされるか……。

「俺が、振られたんだよ」

感情を読ませない冴珠の声が、静かに零れた。

誰か  
(そこにいませんか)

誰か  
(僕の声が聞こえませんか)

誰か  
(気付いてくれ)

誰か  
(恐いんだ)

誰か  
(救ってくれ!)

誰か  
(ここから出してくれ!!)

誰か!!

なにか

何かが聞こえる。

誰かの懐かしい声が鼓膜を揺する。

『お前は本当にそれでいいの?』

はい、と応えたはずだ。それでいい、と。

そう応えると、問い合わせてきた彼女はゆっくりと振り返った。赤く燃えながら沈む夕陽に照らされたその表情は良くなかった。少し寒い秋の日。長い黒髪が強い風に煽られて翻る。太陽を映し朱金色に輝く細い糸が空に美しい波を描いた。

『そつか』

最後の足掻きのような強烈な陽光を背負つた彼女は、一いちらを見詰めたまま沈黙を選択した。光の中から強い視線を向けられているのは分かる。

暫くして再び凜とした背を見せた彼女から、澄んだ聲音を静かに受けられた。

『お前は、少し……迷いを知れ』

ああ、かの言葉は　彼女の言靈は未だ生きている。きっと、わたしは彼女の呪縛を受けてしまったのだ。

彼女の思念はこの身に降りかかり、今も囁かれ続けている。

＊＊＊

（……何だ、夢か）

沢珠は目を閉じたまま、覚醒を自覚した。

視覚を使わずにあたりの様子を把握してゆく。布と毛布の感触で、ここが自室のベッドなのは明らかだ。瞼の肉を透かしてまで届く光は微塵も感じられない。カーテンを引いた覚えはないし、いつの間にか日は沈んで暗くなってしまったのだろう。布団からはみ出た肩が少し肌寒い。寝返りを打ちながら沢珠は声も無く笑つた。

夢を見た。

おかしな夢だつた。

ここ数日、どうも妙な夢を見ている気配はあった。残念な事に目が覚めると同時に忘れてしまうのか、内容をさっぱり覚えておらずもやもやとしていたところだつた。

『お前は本当にそれでいいの？』

（……初めてちゃんと声聞いたのか）

夢で交わされた会話や情景まで鮮明に覚えていたのは今回が初めて

だつた。本当は今日以前の夢で、彼女と何か言葉を交わしていたのかもしれない。冴珠が覚えていなかつただけの可能性もあるのだが。掴み所の無い会話。

（何に迷えつて？）

見たことも無い他人が一体何を言い出すのやら。

冴珠はもう一度寝返りを打つと、布団を引き上げ、頭を潜り込ませた。

『ごめんね』

『ごめんね』

（矢野美鈴……）

夢の中の凛とした声は、いつの間にか別人の声にすり替わっていた。言葉と一緒にあふれ出した涙が、美鈴の頬を伝つていく。それをじつと見ていた自分。

公園の地面に幾つもの水滴が茶けた染みを描いた。耳を布団に押し付けても、記憶の声は消せなかつた。

\*\*\*

折角ブランシユの『テラダチトセ』さんが居る時間帯を狙つて行つたのに、結局違う事で手一杯になつてしまつた。一真があの質問の後、とても居心地の悪い時間を過ごす羽目になつたのは言つまでも無い。心臓にぐさぐさと刺さる言葉で罵られるのを覚悟したが、どれだけ待てど、冴珠は一向に怒りの言葉や感情を向けてこなかつた。それだけでも普段とのギャップがあり過ぎて居心地が悪いのに、当の冴珠はただぼんやりと窓の外を眺めている。

それはもう、新手の嫌がらせかと思いたくなる位、見事に自分の世界に没入していた。

冴珠は不意に現実に戻つてはスプーンを取り、ちいさなプティング

を一時間以上かけて無言で食べ終えた。それを見届けた時は、良くなつたと感謝して拌みたくなつたくらいだ。冴珠を急かして店から退散したが、一真の折角の口論見空しく、無言の男子校生二人組は不審者リストに載つてしまつただろう。

そして今、一真は先日の光景再びといった状況にはまり込んでいる。一真是数学の課題を目の前にして、無意識に冴珠のことを考えている。

（マズつた）

右手にシャーペンを持つているが、それは親指と人差し指の間で旋回をし続けているだけで、鋭く飛び出した鈍色の芯は少しも減らない。

（だつて、まさかさ）

『俺が、振られたんだよ』

中学になつてからも一人の噂は偶に囁かれていた。冴珠が振つたといつ話もあつたし、告白も何も無かつたという噂もあつた。向こうの学校で美鈴に彼氏が出来たというのも聞いたし、冴珠が川上西出身の生徒に告白されて付き合つていたのも知つている。でもその中に美鈴が冴珠を振つたという話は一度も出てこなかつた。だからこそ『冴珠が美鈴を振つた』といつ話を鎌をかけるための材料として選んだのだ。

好きだと伝えるように言つた一真に『仕方が無い』と応えたのは、美鈴に振られていたから？

辻褄は合つし、あのどこか逼迫したような、切なさを含んだ声に相応しい背景だとは思う。

（でも……ぜつて一違う）

一真是自身の動物的な勘についてかなり自信を持つている。根拠が無いと言われば反論できないが、それは一真にとつて大した事ではない。

わからんねーなら、わかるまで黙つて見てる。

結果的にそれを外した事は無いから変える事も無い。

校舎の間を擦り抜け、嘆きのような鋭い風の音。

『……だよ』

唇を噛んで俯いていた冴珠。あの時の冴珠の台詞を思い出せない。

問い合わせば『名前』がどうのこうの言っていた筈だ。聞いた時には冴珠の言葉の訳が分からず、腹が立つただけだつたが。

（あの時も、きっと何かあつたハズなんだ）

少しずつ歪な関係になつていった冴珠と美鈴。一人が親しくなればなる程、美鈴と居ると笑顔が多かつた冴珠の表情は強張つていつた。そしてそれを反射したかのように、美鈴の笑顔もぎこちなくなつてどうしようもない悪循環を繰り返した後、二人は何事も無かつたかのように戻達として別れた。

諦め切れない、けれどどうにもならないと知つてゐる眼差し。

『表情が、雰囲気が……切羽詰まつてゐる』

似てゐる。

単なる偶然だらうか。三年前の冴珠と、今の冴珠の雰囲気は良く似てゐると思うが、当時と今とでは抱えている問題は全く違つもののが可能性もある。

『どうしても解けない問題があつて、しかもソイツをクリアしないとどこにも進めない……みたいな』

（でも……今アソツが切羽詰つてるのは『相応しい名前』についてだらう）

あの、どうにも不毛な問題だ。一真に言わせれば解ける筈の無い問題。それは冴珠も十分理解してゐるようだつた。

（でもその名前にしたつて……何で今更なんだよ）

いつの頃からかは一真には分からぬが、冴珠はずつと自分の名前について疑問を持つていていたと言つていた。それが何故ここ数週間に特にこの数日間で、極端に悪化しているのか。

（やっぱ、それなりに悪化するような理由があるんじゃないのか？どうして人は焦るのか。

（知らなきやならない……から？）

最近頻繁に思い出す島田の言葉を反芻して、一真はハタと氣付いた。  
そうじゃない。もつと根本的なことがある。

時間だ。

時間に限りがあるから急かされるのだ。止められない時との闘いだから焦るのではないか。期限が切られているからこそ、それまでに問題を解決しなければとプレッシャーを感じるのではないだろうか。一真はそこまで考えて我に返った。

「あんの大馬鹿！」

思わず声に出して毒吐いていた。あまりの馬鹿馬鹿しさで、うつかり回転を掛けすぎたシャーペンが跳ね飛び、壁にぶつかって床に転がり落ちた。

（お前、バカだろ）

一体何に焦る必要があるというのか。知人程度の人間に異変を悟られるような「失態」（普段の冴珠なら、自身の振る舞いについてそう断ずるだろう）を犯すほど時間が無いと？

（なんか、オレまで思いつきりマヌケな氣イしてきた）

これ以上黙つて見てはいられない。

何といつても、彼らしく無を過ぎるのだ。

本人が自覚していないのをどう言えば伝わるのか自信が無いが、傍観はもう止めた。兎に角自分の居心地が悪い。

（明日言おう）

焦る必要は無い筈だ。お前には時間があるだろうと。

本当は それこそ小学生の頃から、冴珠がずっと『何か』に悩んでいるのを知っていた。それが『名前』絡みなのは、もう間違いないと思う。

だがそれは時間がどうこうできる類のものではなく、彼自身の感覚の問題だ。麻痺してしまつしか方法が無いものだ。今更焦つたつてどうしようもない。

（冴珠）

ふと一真是不思議に思う。自分の傍らに彼が居るようになったのは、

いつの頃からだろ？。

翌日の昼休み、放課後の約束を取り付けてやろうと意気込んで三組に乗り込んだ一真は、予想外の展開に頭を痛めることになった。

「冴珠、おーい！冴珠くーん？」

反応無がない。一真がわざとらしく正面から覗き込んで、手をヒラヒラ振つて見せても、冴珠の目は動かない。

実を言えれば一真が乗り込んだ時、冴珠は教室にいなかつた。暫くしてどこからか戻つて来たは良いが、すとんと席に座つたままこの状態。恐らく弁当も食べていない。

（おいおい……見えてねえつて事かよ）

これは本当に予想外というのか予定外というのか… そんな選択肢は全く一真の頭の中に無かつた。

彼の昨夜から練り上げた「居心地改善企画」では、事態はもう少し平穀だつた。ブランシュは流石に使えないから、教室でも歩きながらでも良い、冴珠の躊躇を言葉にせせ、その上で「そういう問題じゃない」という事を気付かせよつ という計画だつたのだ。

冴珠は結構捻くれているから考え得る反論は出来る限り考えて、それに対する手段（というのか詭弁と紙一重かもしれない説得）を立ててきたのだ。それこそ数学の課題を放り出して。

「冴珠！」

「…あ、何？」

殊更強く名を呼ぶと、冴珠は漸く初めて呼ばれたかのような反応をした。

「おまえ……大丈夫なのか」

思わず滑り出た一真の言葉に、

「何が」

心底不思議そこに応える冴珠を田の辺たりにして、一真は心がすうつとするのを感じた。

（「マイツ誰だよ）

らしくない、なんて可愛いもんぢやない。

コンプレックスを抱いているらしい「自分の名前」を呼ばれて、気付かないなんて事があるのか。いくら冴珠が一真の声を聞き慣れているとしても、名前に違和感があるなら呼ばれると多少なりともストレスが掛かる筈だ。

それが。

「おまえさあ、どうしちゃったわけ

気の抜けたような声でわざわざ、一真は床にだらしなくしゃがみ込んだ。

「どうつて

「冴珠？」

「……？」

冴珠は一気に視点が低くなつた一真を見下ろし、不思議そうに目を瞬かせた。

「……マジでつかおかしいんじゃ……つて、おこつー…び」行くんだよ！？」

突然立ち上がつた冴珠に一真は慌てる。

「……帰る」

呆気に取られる一真の前で冴珠はさつと帰宅の用意をし出した。

「帰るつて

「何か体が怠いんだ。この間から耳鳴りが煩いんだよ。さつきちゃんと保健室で許可証貰つて来た」

（おこおこおこ……！）

冴珠はその日、五時限目を受ける事無く早退した。

冴珠こだまは普段乗らない時間帯の電車に乗り込んだ。

当然ながら朝の鮨詰め状態や、夕方の学生天国とは大分様相が違つた。車両に人影はまばらでどこにでも座れる。冴珠は陽射しが入らない方の七人掛けの座席の端に深く腰掛けた。後ろの壁に頭を預ければ、電車の振動が直接骨に響く。

体が怠いのは、本当だつた。

少し頭も痛い。

冴珠は目を閉じる。家に帰るには半時間程この電車に揺られなればならない。ゆっくりと加速してゆく列車。レールの継ぎ目の上を車輪が通る度、規則正しく音が変わる。

数日前から急に気になりだした耳鳴りが少しだけ紛れる気がした。耳鳴りは何かの言葉のようにも聞こえるし、ただの雑音にも思える。

『葛かずらくん』

さつき下駄箱へ向かう階段の途中で美鈴と擦れ違つた。昼休みの最中でそこそこ人もいたが、美鈴の声は雑音に紛れなかつた。相変わらず、彼女の声は大きくも無いのに 韶く。それは昔から変わつていない。

『ごめんね』

あれは、冬のこと。

冴珠にとつて美鈴は、あの当時一番親しかつた女子と言つて差し支えないだろう。お互い意識していたにせよ、付き合つとかそういう話にはならなかつたが 繁華街に一緒に出掛けるといったデートの真似事をした事は数回あつた。彼女と一緒に過ごすのは、楽しかつた。

美鈴の祖父が亡くなつたのを、冴珠はクラスの友達より早く知つていた。家族の中で引越しの話が持ち上がつているのも秋には聞いていた。

彼女に引越しの話がなければ、ふたりの関係はもう少し違つたものになつていたかもしれない。

美鈴は多分 焦つっていた。引越しの話を聞いた冴珠も相当ショックを受けたと思うのだが、当人には及ばないだろう。

今まで過ごした家から祖母の家へ。

彼女を取り巻く周囲の環境が大きく変化するのは間違いない。「隣の市」と言われたつてローカル電車で一時間近く掛かる。

『葛くんが、好きだよ』

秋の真っ赤な夕焼け空を背景に、美鈴はなんでも無い風を装つて言った。

休日のデートの真似事の帰り道。

その数週間前に、冴珠は引越しの話をしていました。先の見えないこれからをどうやっても意識から遠ざけられず、二人とも感傷的になつていた。東の空は既に暗い紫色に染められていたがお互い帰る気にはなれず、繁華街の近くにある大きな公園に寄り道をした。時間を止められない人間の、小さな抵抗だった。

公園のベンチに座った冴珠の前に立つて、小さな手を握り締めていた美鈴。少し離れたブランコや遊具では子供の元気な声が響いている。芝生を敷き詰めたグラウンドでは親子連れや友人同士の楽しそうな姿があった。ぽつぽつと置かれたベンチには人がいるものもあつたし、そうでないものもあつた。

呼ぶ声に、顔を上げる。

(昨日の夢は、この記憶の所為か)

赤い夕焼け。振り返る少女。眩しさに目がくらむ。響く 声音。あの引越しになれば好きだとは言わず、生温い心地良さを保つたまま友人以上恋人未満の関係を続けようとしたのではないだろうか。美鈴は 好きだとは言つたが付き合おうとは言わなかつた。

ただ、名前で呼んで良い?と彼女は言つた。

「呼んでるよ」

低くも高くも無い澄んだ声に、冴珠はハツと目を覚ました。いつの

間にかすぐ隣には小さな子供が座っている。

(…今の…耳鳴りか?)

多分小学校の一、三年生位だらうか、黒いハーフパンツからのぞく細い脚は床に着く程成長していない。その脚を電車に合わせて軽く揺らしながら、利発そうな顔をした子供は茶化た色の瞳で冴珠を見上げてきた。さっきの声はこの子供の声だらうか。

不意に天井のスピーカーからアナウンスが流れ、下車する駅に間もなく到着する事を知る。減速する列車に合わせ、冴珠は重い鞄の取つ手に腕を通し直し立ち上がった。

音を立てて両側に寄せられる扉をぐぐり、冴珠はホームに降り立つ。生ぬるい風が横から纏わり付いてきた。

口を閉じて動き出した電車を振り返る。声を掛けた子供がガラス越しにちらつと冴珠を見て、小さな笑みを浮かべる唇で何かを呟いたように見えた。

(…う　い　?)

列車はどんどん加速してゆき、すぐにその子供の姿は見えなくなつた。

改札を抜けて駅のロータリーの前で、冴珠は訳も無く空を見上げた。少し濁つた空に、まだ満ちきらない白い月が浮かんでいた。

\*\*\*

「葛くん、やつぱ調子悪いの?」

放課後、ビニが心配そうな井上に話しかけられ、一時は内心溜息を吐いた。

「わかんね」

「早退したつてシマシマ言つてたよ。顔色悪かつたつて

「急いで帰った。よつと」

一真は声を掛けて重たい鞄を肩に担いだ。反動で体がふらつと泳ぐ。

「あんたそれじゃ年寄りだよ…」

「しゃーねーだろ。マジ重いし」

一真としては気分もあまり直しくないので、掛け声でも掛けなければやつてられるか! という心情なのだが、当然井上にはその辺の事情はわからない。

「あ、歓迎会、来週の金曜の放課後になりそだから」

「わかった。伝えとくわ」

じゃあなと言つて、一真はひとり駅までの道をとつとつと歩く。新たに揃える様に指定が有つた辞書を買うため、駅へ向かう途中にあら大きな本屋へ寄らなければならない。辞書を買うと鞄が重くなるのは必然で一真は更に気分を沈ませた。いつそのこと一冊揃えて置き勉という手もあるが、それには母の金銭的援助が必要だつたし、今日この重い鞄を抱えたまま一冊も買つ気にはなれない。

本屋のガラス製の大きな自動ドアをくぐると、紙とインクのにおいに満たされた独特の空気が広がつてゐる。一真は一階の学生コーナーで目的の古語辞典を入手し、のろのろと階段を下りる途中、一階の文庫本のコーナーに美鈴の姿を見つけた。美鈴は一真が店に入つて来たのを知つていたのか、一真が美鈴を見るより先にこちらの方を見ていたようで田が合つと笑顔で手を振られた。

「何見てんの?」

「んー古文の先生のおススメシリーズ」

美鈴が手にしていたのは『竹取物語』。棚の空白の横を見ると『衣物語』『源氏物語』『落窪物語』などの日本の古典文学作品の名が並んでいる。美鈴によると、このシリーズは原文と先生曰く『わかり易い』訳が付いているらしい。試しにぱらぱらと田を通せば、古文を敬遠気味な一真でも読めたから、あながち眉唾でもなさそうだった。

「順番に読んでいくかと思つて」

「竹取物語つて物語文学の一番古いヤツだっけ。中学でやつたなあ」

「教科書一緒だつたのかな。私もやつた」

「マジ? これ結構シユールな話だつたよな」

昔々で始まる、いわゆる御伽噺としての『かぐや姫』は勿論一真も知つていたが、中学で習つた『今は昔、竹取の翁といふものありけり』で始まる『竹取物語』は、知つてはいるようでも知らなかつたものだつた。

竹から生まれた美しい少女。求婚者に無理難題を吹つかける絶世の美女。満月の夜月の使者が来て、おじいさんとおばあさんとの別れを悲しみながらも泣く泣く帰つていく。

大雑把に流れだけを見れば『かぐや姫』も『竹取物語』も大差ない。だが、子供用に脚色された『かぐや姫』と『竹取物語』とではやはり違う部分もある。

奥が深いといふのか 求婚者には実在のモデルがいたり、内容から筆者は朝廷の権力者に否定的だつたといった話を聞いて、一真は昔話も結構やるなど感心したのだ。

「あんなに帰るの嫌がつてたのに、あつさり天人に戻つちゃうしねー」

美鈴の口から天人という聞き慣れない言葉を聞いて思い出す。そういえば一真が一番驚いたのは、これは日本で一番古い宇宙人の物語なんだぞ! という先生の台詞だつた。

「かぐや姫は何で天人に戻つたんだっけ?」

「羽衣を羽織ると人の心を忘れちゃうらしいよ。羽衣つて特別だつたのかも。他の話でも天女の羽衣を隠して、返さない話あつたし」

「それ、結婚したけど隠してた羽衣が奥さんに見つかって、奥さんが結局帰っちゃうヤツ?」

「そうそう。色々パタンあるらしいけど 天人に戻るには何かアイテムが要るつて事なのかなあ」

買つてくるねと美鈴はレジへ向かう。一真は一冊分ぽつかりと空いた棚を見下ろし咳いた。

「アイテムねえ……」

天の羽衣が人と天人とを分けているなら、それを纏えば人は天人に  
なれるというのだろうか。

（ありえねー）

一真が出口に向かうのと美鈴が会計を済ませたのとがほぼ同時だつた。並んで店を出ると途端に強風が吹きつける。日陰は未だ寒く一人は身を縮ませた。

「そうだ。昼休みに葛くんに会つたんだけど、モッチは早退したの知つてる？」

髪が乱れるのを手で押さえながら、美鈴が一真を見上げてきた。

「体辛そうだつたけど、大丈夫かな」

「…わかんねー」

昨日汎珠から聞いた台詞が、どうにも一真の反応を鈍らせている。美鈴は本当に汎珠をふつたのだろうか。あの時の一人の雰囲気は本当にそういうものだつたのだろうか。

「どうしたの？」

「や、何でも……」

言い濶んだ一真に、美鈴は足を止めた。つられて一真も次の足を踏み出せなくなる。

「もしかして私と、葛くんのこと？」

あまりに直球過ぎてそれだ！とは言えず、一真は決まり悪そうに頭を搔いた。

「あー…もう、終わつた事なんだろ？」

「そ。振られちゃつた」

「は？」

瞠目する一真に美鈴は苦笑した。

「私じゃ、駄目だつたんだ」

誰が 誰が 誰が

望んで壊した壁の向こう

広がる世界に裏切られた者は、絶望に足を踏み出す氣も萎えたのか  
元の場所に力無く座り込み、うなだれたまま膝に顔を伏せていた

「私じゃ、駄目だつたんだ」

「それマジ……？ つて、うおッ」

突風に背中を強引に押され、一人は再び歩き出した。一真は斜め前  
を歩く美鈴を見下ろしながら 遂巡した。会話をどの方向に運べ  
ば良いのか、さっぱり見当が付かない。  
結局一真は自分の口に任せる事にした。

「つーか、良くわかつたな」

正直一真は、美鈴に正確に迷いを言い当てられかなりヒヤッとした。  
一真の内心の焦りを知っているかのように美鈴は可笑しそうに目を  
細めた。

「実はねえ、昨日イノッチャやシマシマ達にも訊かれたんだ。『そ  
いえば、結局葛<sup>かずら</sup>くんとどうなつてたの』って。さっきのモッチはそ  
れと雰囲気が似てたから

美鈴の種明かしに一真はへりつと脱力した。

(井上……おまえ、直球勝負かよ)

女子同士だから出来る技なのか、井上故の言動なのかは判じ難い。

ただ一真には真似できない芸当だつたのは確かだ。それにしても、と一真是思う。

(アイツらも 覚えてたんか)

一真是美鈴の顔を見るまで、二人の事をすっかり忘れていた。大体二人がどつこのつとのいう噂が流れたのも、中学の最初の一年間までだつた。その間に冴珠に彼女が出来た事も影響しているのだろう。ただ 冴珠は中一の夏に一人目の彼女と別れてから、誰ともそういつた話にはなつていなかつたが。

懐かしい顔ぶれや過去の話題がぽんぽんと飛び出ても、すぐにはピント来なかつた。美鈴の『他、誰がいる?』という台詞に触発されるまでは、酷くぼんやりとした『何か』が一真の頭の奥の方で引っ掛かつていただけだ。それがあの台詞に釣られて、小学校時代からのメンバーの顔をパパパツと思い並べた時に あつと思つた。

美鈴と冴珠の組み合わせ。

偶然その前日に思い出した冴珠との小さな諍いも、一連の記憶とじて繋がつた。

『……お前ら、メシ喰つたんか?』

一真是態と話題を逸らした。何故と理由を問われても一真是答えられない。本能的に、そこで冴珠の名前を出したくなかった、としか言えない。

「モツチは昔から葛くんと仲良かつたから、何か聞いてない?」

「や、アイツそういう事あんまいわねーし…」

そうだね、と美鈴は頷いた。

「あーあ。イノツチ達には何も無かつたよつて言つちやつたんだけど、モツチも何も聞いてないなら、そう言えば良かつたかなあ」美鈴は悪戯がバレた子供のような表情で一真を振り返り、そう言つた。

「今更だから訊くけど 付き合つてた?」

一真是ほんのちよつぴり迷つた後で、結局好奇心を優先させてしまつた。

「ううん。離れちゃうとか、遠い、とか色々考えちゃって、結局そんな事言えなかつたし。今思えばこうやって同じ学校に通えるんだから、大した距離じゃないんだううけど。でもあの時は物凄く大きなものに思つたよ」

だらうなあと一真も思う。お別れ会の時、クラスの女子は遠い、寂しいと言つて泣いていた。卒業式という涙の異空間にどっぷり浸かつた後だつたから、男子も女子のすすり泣く声に結構もらい泣き（本当に泣いていたつて、格好付けようとしたい年頃だつた。多分今もだらうけれど）させられていたのだ。

思い出せば「卒業式なんて何でもねーよ」と粹がつていた男連中だつて、式が終わる頃には皆鼻をぐずぐずさせ、隠れて赤い眦を擦つていた。『君達はここを卒業し、ひとつ大人になるんだ』と言われても、どうもあの儀式では「別れ」や「郷愁」といった胸をぎゅつと締め付けられるような感情ばかりが意識されていたようだ。樂天的な一真ですらそういうた感情に逆らえなかつたのだから、あの儀式の独特の切なさは大きな力を持つていたのだろう。だから、と美鈴は続けた。

「付き合つとかそんなのは置いといて、ただ特別になりたかつた…違つかな。特別だつて、実感したかつたのかな。欲張り過ぎちゃつたんだ、きつと」

「その特別つてさ、どういう特別？ 泳珠にとつて……や、何でもない」

一真から見れば美鈴は十分、泳珠の特別だつたと思う。ただそれをストレートに美鈴に告げて良いものか、迷つた一真は笑つて誤魔化した。美鈴もそれを見て少し笑つた。

「あの当時、女の子は殆ど『かずらくん』って呼んでたでしょ」それは泳珠に限つた話ではなかつた。他所の学校はどうなのか知らないが、川上小の女子は大抵男子を渾名か名字に君付けで呼んでいた。一真だつてあの当時は一応『坂本くん』だつたのだ。中学に上がつて直ぐに呼び捨てに変わつたが。

「男子は結構名前で呼び合つてたけど、女子で『冴珠くん』って呼んでたのはほんの数人だったじゃない?」

「あーそうだったかも」

「ちょっと、羨ましかつたんだ」

（あ……）

一真の中でそれが曖昧に組み立てられていた情報のピースが、ぱたぱたと一つの過去の姿を描き出していく。

名前。

美鈴。

『 だよ』

（冴珠）

一真は歩く速度は変えないまま、白くかすんだ空をゆっくりと見上げた。

（おまえ……美鈴の事、本当に好きだったんだ）

\* \* \*

なにかがきこえる。

早退して帰宅した冴珠は一応、病人らしくベッドに横たわつていた。とにかく身体が重い。だが病氣かと言われると、どうも違うような気がするが、あまりのだるさに任せ冴珠は結局目を閉じる。そうして静かにしていると、冴珠の耳は様々な音を拾う。家の前の道を走る車のエンジン音、空をゆく飛行機、学校帰りの小学生の声。あらゆる雑多な音に紛れて、ひとつ。この高く、ささやかな音は耳鳴りだ。

ここ数日の間に、耳鳴りはだんだんとほつきついた音に変わつてきていた。耳鳴りは脳に関係がある場合もあると、聞いた気がする。どこかに異常があるのかもしれない。

だが冴珠は不思議と不気味さや恐怖は感じなかつた。

『冴珠くん』

いつの間にか美鈴の声が、耳鳴りに溶け込んでいる。

（もう、終わつたことだろ）

布団の中で、少し体をずらした。かすかにベージュを含んだ白い天井をぼんやりと見詰めて、冴珠は思う。ほほ三振りに再会した美鈴は笑つていた。それで十分だ。

あの秋の日、名前を呼んで良いかと言われ、冴珠は ほんの一瞬躊躇した。それは本人の意識に上るか上らないかの微かな心の動きだつたから、気付けなかつた。

『良いよ』

そう、返事をした。美鈴が嬉しそうに破顔し、冴珠も目元を緩ませた。

日が暮れて急速に気温を落ち込ませるバス停に一人で並び、定刻より少し遅れているらしいバスを待ちながら、冴珠はふと公園を振り返る。暗い影のよつに姿を変えてしまつた木々が、公園を縁取つていた。

紫の闇の中で街灯が点々と抵抗している。

目を上げれば、地上の事など素知らぬ振りで、輝きを増し始めた月が東の空に浮かんでいた。西の空は微かに赤く、あの鮮やかな色彩を静かに喪おうとしている。

冴珠は少し前まで自分達がいた公園の光景を思い出す。

きらきらと輝く瞳で真つ直ぐに自分を見詰める少女。夕焼けに紺れそうな、少し照れて赤くなつた頬。

『好きだよ』

その視線もその言葉も、美鈴の意識の全ては確かに自分に向けられていた。

（終わったこと、だろ）

もう一度冴珠は自分にそう言い聞かせる。それでも回想は勝手だつた。もう長い間思い出していくなかつたあの日の記憶をわざわざ引っ

張り出してくる。

『冴珠くん』

『え…』

後ろから、大事な物を扱う様な声で美鈴が初めて名前で冴珠を呼んだ。

美鈴の唇から届いた澄んだ声に冴珠は振り向き、ゆっくりと瞬いた。美鈴は さつきよりずっと照れているようで、うわーと言いながら頬を両手で押さえている。

(それは、誰のこと?)

(美鈴は誰を呼んでいるんだろう)

一瞬極自然にそう思つてしまつて、冴珠は自分にぞつとした。

(何考えて: 田の前の自分に決まつてゐるだろー)

冴珠は慌てて言い聞かせる。

不意に、心の奥底で飼つていた魔物が卑しい笑い声を立てた。心の内に潜んでいたそれは、体半分くらいするりと抜け出して背後から冴珠に耳打ちする。

『いつかこいつなる筈だつたのさ』

冴珠の混乱を予期していたかのようだ、魔物ははしゃいでいた。胸の内側を鋭い爪で悪戯に突き、囁く。

『わかつちまつただろ? それはオマエの名前じやないよなあ』

ぐくりと喉を鳴らし、冴珠は大きく息を吸い込む。そんな馬鹿なことがあるか、と辛うじてその声を無視した。

その後 暫くは冴珠も上手く自分を繕えた。  
(この間のはきっと僕が慣れていないせいだ。美鈴の呼び方が少し  
ぎこちなかつたせいなんだ)

『冴珠くん』

笑顔の美鈴。クラスメイトの何人かは呼称の変化に敏感だった。軽くからかわれたが冴珠は特に気にする素振りも見せず、自然に返事をしてみせた。

『冴珠くん』

『冴珠くん』

振り向くのが少しずつ苦しくなる。

美鈴に名前を呼ばれる度に嘲笑う魔物は大きくなり、心の内側で膨れ上がる。

『無理だつて』

『足りないんだよ』

美鈴は 僕を呼んでいる。

その筈なのに、何故か苦しい。

『オマエには大事なものが足りないんだよ』

(僕には 何かが足りない、のか)

『そうだそうだ！やつと氣付いたか！』

(違う、違う！そんな馬鹿なことは無い。どうやつたつて馬鹿げてる。第一何が足りないっていうんだ)

幾度も否定を繰り返した。その度に魔物は認めちまえよと冴珠を唆す。

『強情だなあ。足りないんだつて』

(何も考えるな。相手にするな！)

魔物は気紛れで、その声を途切れさせる事がある。日増しに騒がしくなるそれがはたと気配を消し、頭の中に冴珠だけの空白の時間がが

取り戻される。

それは、久々に取り戻したひとりの時間だった。

訪れた静寂に、冴珠はただ安堵していた。本当は こういった時こそが恐ろしいのだと、冴珠はその時気付いていなかつた。

家族、親戚、友人や教師など…今まで出会つた多くの人に名を呼ばれたが、その誰もが冴珠の名前を呼んでいない。

それはもう誤魔化しがたい事実のような気がした。あの数年前の春の日に違和感を自覚してから冴珠は飢え続けている。あの魔物が言うように何かが「足りない」と感じている。

（でも、もしそうだとしても ）

彼女なら 美鈴なら。

空白に向かつて的外れな名を投げられているような、この虚しさを埋められるんじやないか。

冴珠はそう思つた。そうであつて欲しいと願つた。

あの時、気配を隠した魔物は腹を抱えて笑つていたのだろう。破綻は時間の問題だつたとしても、思考を整理したからこそ現実との落差をより感じてしまうのだ。

『冴珠くん』

綺麗な声。

きらきらとした瞳。

花が咲くような笑顔。

美鈴なら、呼んでくれるんじやないか。

『冴珠くん』

（……どうして）

どうして、 美鈴は『僕』を呼んでいないんだろう。だって、あんなに澄んだ声で呼ばれているのに。目を見て、目を合わせて、僕を見て嬉しそうに笑うのに。

（誰の、こと？）

誰を呼んでいる？

自分に大事なものが足りないから、駄目なのか。呼ばれても、呼ば

れていない気になるのか。

寂しい。苦しい。目の前が真っ暗に塗り潰され、思い知らされた。魔物の言つ通りだ。自分には何かが、「核」とも言つべき何かがぽつかりと抜けている。

僕には『中心』が無い。

足りない。

どこにも無い。

美鈴は間違いなく僕を呼んでいるけど、僕の足りない部分を呼べていない。そこをちゃんと呼ばれなければ、僕という存在は満たされない。

美鈴が呼んでいるのは 僕じゃない。

真冬の寒気が流入した二月のある夜、冴珠は家のベランダに座り込んでいた。月が辺りの屋根や道を真っ白に照らしていた。『ごうごう』と吹き荒れる北風、腰を下ろしたコンクリートの冷たさに体温を根こそぎ奪われ、指先が悴んで感覚が無くなる。冴え渡る凍えた星空。目頭と噛み締めた唇だけが熱い。

来週美鈴は引越しを告げる。後、ひと月だ。訪れる現実の空虚さに冴珠は叫び出しそうだった。

(どうして…)

『自分を誤魔化すのも限界なんだよ。気付いてたんだろう？ 本当は誰も自分の名前を呼んでいないって。名前を付けたオマエの家族ですらオマエの名前を呼んでないんだよ』

もづ、五月蠅い魔物に反論する気にもなれなかつた。そもそも何故こんなおかしな感覚を持つてしまつたのだろう。

『ごめんね 困らせちゃつたね』

冴珠が少しずつ追い詰められるのを、美鈴が一番感じていたに違いない。美鈴は既に以前の『葛くん』に呼び方に戻していた。

もう、時間が無い。冴珠はどうして良いのか分からぬまま、美鈴

との別れの日を迎えた。

(「じめん）

美鈴は何も悪くない。ただ冴珠は己の事で精一杯で、それを美鈴に伝えられなかつた。美鈴だつて引越しや別れを控え、色々思い悩む事があつただろうに。

『仕方ないだろ 名前を呼ばれても それは俺のことじゃないんだよ』

卒業式の後、荒んだ気持ちで吐き出した言葉に一真が怒つたのも当然だつた。

＊＊＊

冴珠が目を覚ますと、酷い寝汗をかいていた。少しオレンジ色を含ませた光線に染められた自室の壁や天井。ベッドヘッドの目覚まし時計を見ると、四時過ぎだつた。

額に張り付く前髪を掌で払い除ける。シャツも換えたいし、水でもコーヒーでも良いから飲みたい。喉がカラカラに渴いていた。だが、階下に行くのも面倒だつた。とにかく全身が重い。

……シャン……シャンシャン……

冴珠の耳鳴りは、気を抜くと意識に滑り込むようにして存在を知らしめる。今まで気付かなかつただけでずっとお前の傍で鳴り響いていたのだというような自然さだから、気味が悪いと思わずには済んでいるのだろうか。

冴珠はその「おと」に耳を傾けてみた。

(何の音だ)

細かく振れる小さな音。耳鳴りは秋の夜を飾る虫の音のよつだと思つていたが、鈴の音に近いかもしない。耳に、いや、身体全体に心地よく染み渡つてゆく。漣のような、うつかりすると聞き漏らし

そうな僅かな音。

耳を澄まし音源を探ると、それはびひやら移動する」とが出来るらしかった。

可笑しな話だ。音が来る、なんて。

けれど確実に近付いて来ているのだからそう表現するよりない。汎珠はじつと神経を凝らす。僅かな振動も鼓膜に反射させるようだ。

……じうやり西の方が音源らしい。

音が汎珠のすぐ傍までやって来るのが判る。

聴こえるのだ。

（これ、いわゆる幻聴ってヤツなのか？）

幻聴。世の中の耳鳴りが聞こえるという人は一体どうしているのだろう。気になつて生活にならない、なんてことはないのだろうか。そもそも　他人の幻聴は、これと同じ音なのだろうか。

海の波に誘われてゆくよつな……心地よい幻聴といつのも変な感じだ。

（気持ちいい）

汎珠は目を閉じて、その音に身を任せた。

音はゆらり…ゆらりと寄せては返す波のリズムを真似ているのだろうか。視界を放棄するとそこは海のただ中のよつにも感じられた。広々とした空間に優しく満ちる漣。

抗う必要は何も無い。

……シャンシャン…しゃん…

鼓膜に届く音色が少しづつ変化する。

音量がゆるやかに上を田指す。

シャワーの「ツクを徐々に捻つた時の、柔らかく降り注ぐ雨のイメージ。

（別にいいさ）

鈴の音が降り注ぐ雨になつたとこで困る」とはない。汎珠にとって、これが幻聴でも構わなかつた。

質感を伴う音の水流が汎珠の周囲を満たしてゆく。ゆづくつと音の

中に飲み込まれてゆく。

ゆらりゆらりと巡る大きな流れに、次第に肉体が意味を持たなくな  
る気がした。深く、深く体は底の無い何処かへ沈み、精神だけがた  
ゆたいながら肉から解放されてゆく。

ここは海の底なのか、宇宙の内なのか。

肉体は無くとも自分という『もの』は存在している。

それは不思議な感覚だった。

自分はなんだ？

ゆらゆらと不確かな空間に、紛れることなくしっかりと自分がいる。  
けれどその感覚は広く広く、拡がる世界の内を全て感じている。

宇宙とひとつになる。

しゃんしゃんしゃんしゃん

冴珠は何がなんだか解らなくなつて来た。

感覚から得た情報を纏めようとしても言葉が鈴の音に紛れてしまい  
そうだ。

ここがどいで、自分がどうやってこの世界に存在しているのか。

（鈴が）

次第に大きくなる音。絶える事の無い渦。

：しゃんしゃんしゃん…しゃんしゃん…

音はもう意味を持たない筈の肉体を打ち付ける。どいかへ置き忘れた肉体へ、意識の一部だけが繋がつている。

（雨、だ）

そう思つた途端、不意に意識が体と深くリンクした。

冴珠は今大雨に全身を打たれている。その激しい雨が身体に降り注  
ぐのか、意識へ降り注いでいるのか冴珠には判断できない。  
責めるように、急かすように土砂降りの雨が冴珠を揺さぶり続ける。  
苛む雨は精神の曇りを洗い流して清めてゆく。打ち付ける鈴の音は  
滝なのか。身体ごと冷水に浸されている錯覚に陥る。  
これではまるで禊のようだ。

禊が虚飾を削ぎ落としてゆくものならば。

(「この体が…邪魔なのか?」)

砂金を水底から見つけ出すために篩にかけるよつて、いらぬ泥は流してしまえ。

洗い流される泥。

余分なもの。

(「俺には…何が残るんだ」)

はつと思い浮かぶ言葉。

今、どんな言葉を続けようとしたのだろう。

首筋がぞつとしたが、それが何だと言われても汎珠の思考が追い着かない。

今自分は一体何に怯えた?

(「核が」)

核が無いのに?

(「中身を取り出すと」)

シャラシャラシャラシャラ  
シャンシャンシャンシャン

鈴の音が邪魔をする。思考が纏まらない。

汎珠は必死で言葉の糸を手繰り寄せせる。

：俺は今、何処にいるんだ?

核が無ければ どうなる?

(「篩にかけても 何も…残らないんじゃないのか」)

心地良かつた筈の音は、もう汎珠のコントロールできる範囲には無い。

肉体なくして精神が存在できないのが当然…ならば。

全ては錯覚?

(「やめてくれ!」)

続く言葉を振り払おうと、汎珠は呻く。

ざわめく世界。止まらない宇宙の波。眠りたがらない子供をあやすように、渦巻いて汎珠を呑み込む。

考えたく無い。言葉にしてしまうのは恐い。だがそいやつて言葉で

意識を繋いでおかないと、渦巻くものに滾われてビ一一かに流れそうだった。

それは もつと恐ろしい事に思われた。

肉体と切り離されてなお、確かに存在していると思った自分の精神。だがそれには何か大切な、「核」とも言つべきものが無いと汎珠はもう知つている。

(どう、なるんだ)

核の無い精神は肉の鎧が外れれば、形を保てずに液体のように流れ出してしまふんぢやないのか。篩に掛けても、何も残らないなら鈴の音が暴いてゆく。見せ付けられる。己は何処にもいない。海の底に沈むことも出来ず、細かな泥の様に網目をすり抜け、濁つた流れになつて溶けてゆくだけ。

シャラシャンシャンシャンシャラシャラ

では、こうして流れに抗おうとしている『自分』は…

……残つたコレは何？

……飲み込まれて埋もれて……自分は一体どこにいる？

シャンシャラシャラシャラシャラシャラシャラシャラ  
奔流は汎珠の思考を暴力的に攪拌させ、言葉で意識を留めようとす  
る汎珠を嘲笑う。そんなものは何の救いにもならない。ただの詭弁  
だと、力で捻じ伏せようとしている。

汎珠は苦悶の汗を浮かべた。

(ヤバイ……ッ！)

恐ろしい、底抜けの空虚がすぐそこにある。

(喰われる！－！)

鈴の音はもう何かわからないものに変質していた。ヒステリックな  
金属質のそれは、滝のように汎珠を真上から打つ。叩きのめしバラ  
バラにしてしまおうとしているのかのよつた。

(たすけてくれ！)

声が出ない。指一本動かない！

(押し潰される！－！)

音に殺される……！

凄まじいまでのプレッシャーが全身に圧し掛かる。何かの糸が  
ブツリと切れた気がした。

核の無い自分。

中身が意味を持たないのならば、己はただの容器じやないか。  
けたたましく嘲笑う魔物。声無き声で歌われる惡意。  
イレモノなら幾らでも代わりが利くんだつて知つていいんだりう。  
誰もお前の「核」<sup>なかも</sup>なんて求めてないよ  
求められないガラクタならばぶちまけてしまえ！

（誰かっ！）

何も無い。

何も残らない！

この恐怖から救い出してくれ！

「ツー！」

最後の悲鳴すら音にならなかつたのかも知れない。  
体中で感じられたのはただ痛みすら伴つて降り注がれる、『それ』  
だけだった。

暗闇に襲われて世界は消滅する。

沢珠はそこで意識を失つた。

誰が

(こんな結果を予想するものか)

誰が

(こんなことを望んだというのか)

誰が

誰が呼んでいる?

懐かしいこえがきこえる

美鈴が反対車線のホームに入つて来た電車に乗り込み、窓際で小さく手を振つているのを見送つた。一真の乗る電車は四分後に入つて来る。なんとなく駅の柱の近くにのそつと立つたまま、一真是西日に馴染んだ辺りの光景を眺める。

一真にも中学時代付き合つた彼女がいたが、彼女に名前を呼ばれた時、それが違う人間の名前だつたら、やつぱりどうしようもなくシヨツクだ。

(だつてさ、一人つきりの時に名前呼ばれて )

そこで相手がしまつた、ごめんとバツの悪そうな顔でもしたらまだ良い。前の彼氏と間違えちゃつたでも、許せる(と思う)。最悪二股だつて、自分が本命で無かつたとしたつて、それはそれで次の行動に移せる(と思う)。大きなダメージを負つた所為で暫く人として使い物にならない氣もするけど)。

どんな選択をするにしろ 頑張つて本命になろうとアピールするかもしけないし、カナシイ思い出として封印するかもしけないが

それぞれに対処の仕様があるのは間違いない。

『冴珠の場合は違う。

美鈴は気付かない。美鈴は他の男子には向けられなかつた、あの当時のきらきらした笑顔を向けて、冴珠を呼んだんだろう。クラスでは多少人目を気にして、それが控えめになつていてはいえ、冴珠と一緒にいる時の美鈴は本当に嬉しそうで 可愛かつた。

その彼女に呼ばれたのが自分の名前で無く、他人の名前だつたら。あの当時を思い出すとありえないシチュエーションに思えるが、冴珠だつて一真がシユミレーションしたような、何かしらの行動をとつた筈だ。

（でも、相手が自分だつたら、どーしようもねーじゃん……）  
たとえ「自分じゃない」と思つても、世間一般の人にはそんな事情、解りはしない。奇跡的に解つて貰えても、じゃあ一体何と呼ばれたいのだと訊かれたら答えられる筈も無い。

結局自分にしか感情を向ける事が出来ない。

（…ありえねーから、冴珠は余計苦しかつたんか）

美鈴が呼んでいるのは自分だと判るからこそ、辛かつたのではなかつたか。

（……なんだよ、それ）

知らなかつた。さつきの美鈴との会話や、名前の違和感の話を聞いていなければ、一真是きっと知らないままだつた。冴珠は恋愛に対してどこか冷めた態度をとつていてるような気がしていたが、本当は違つたのだ。

昔の一真是（今でもあまり変わつていらない気がするが）割りと惚れっぽい性質で、いつだつて好きな人や気になる子は結構いた。その時は目の前に夢中だし、アピールする時は一筋なのだが 振られても、実なくてもそれは一つの想い出として、気持ちの整理をしてきた。でも冴珠は小六の時に、既にそんな事が出来ないほど人を好きになる経験をしていたのだろう。

（『冴珠くんつて大人っぽいよねー』…か）

当時の女子の台詞を思い出す。

(でもアイツは)

『僕は大人になんかなりたくない……』

一真が沢珠の事を強烈に意識し出したのは、昔ふと彼が漏らした言葉を聞いてしまってからかもしれない。

誰に言うでもなく呟かれた言葉。好き勝手に声を上げてざわめく教室の中で、その声は一真の耳にぽーんと飛び込んできた。一真は反射的に声の方、隣の少年を凝視していた。

なんで、と訳を尋ねようとして一真は口を噤んだ。

一真が思い留まつたのは、過去にひとり「」とに合いの手を入れられて恥ずかしい思いをした経験があつたからだ。だがそれだけではなく、子供なりに興味本位で聞いてはいけないような雰囲気を察したという部分もあつたと思つ。

その言葉を聞いたのは、小学校の社会学習か何かの時間だつた。確かに将来の夢、将来、どんな仕事をしたいですかという課題だつた。どんな仕事があるかを調べ、自分のなりたい職業についてのレポートを発表するという授業で、その日は自分の知つてゐる職業やなりたい職業を書き出し、それについて調べる手段や手順を整理するように指示が出ていた。

「おまえ……」

ちらつと沢珠の手元を見れば、授業の最初に配られた紙は白紙のままだつた。沢珠は紙をじつと見詰めたまま鉛筆を持とうともしない。

結局沢珠はその時間中、何も書かずに黙つて過ごした。

(来週の発表、どうすんだろ)

何も書かないまま発表に臨むのだろうか。

半分の心配と半分的好奇心で迎えた次週の授業で、沢珠は平然と「喫茶店をしたいです」と言つた。そのままきちんと喫茶店のレポートに入り、恙無く彼の発表は終わつた。何で喫茶店なのかと後でこつそり訊けば、親戚がやってて樂しそうだつたからという答えが素

つ氣無く返ってきて、拍子抜けしたのを覚えている。

「コーヒーって美味しいんだぜとにやつと笑つた顔が、大人びた台詞と裏腹で、そのままじゃれ合いになつた。

沢珠は当時の一真にとつて、かなり大人びた子供だった。まず第一に一真のよう後に後先考えず、つい馬鹿をやることが無かつた。その辺がギャー・ギャーと評された自分と、大人っぽいと評されていた沢珠との違いだろう。

『僕は大人になんかなりたくない……』

けれど、今あの時と同じ場面に遭遇したとしたら、一真はどう思うだろう。

（あれは大人っぽいんじゃなくて……）

誰よりも大人びた瞳をしている子供。

そう、感じるのでないだろうか。彼は大人になる事を恐れていたのではないだろうか。

その頃の一真は、成長する事を楽しみとしか受け取つていなかつた。早く大きくなりたい、中学生になつて、高校生になつて、と将来の夢を膨らませるのに大忙しだつた。特になりたいものがあつた訳ではない。ただ単に子供には認められない『大人の特権』に憧れていたのだ。年の離れた兄には許され自分には許されない事の多さに、歯痒さを感じていたのだ。

それだけに、沢珠の咳きを聞いた瞬間一真は酷く狼狽した。一真は心のどこかで、沢珠に軽い裏切りを受けたようにも感じたが、それは同時に心地の良いものだつた。

その一言は一真の中であやふやな存在に過ぎなかつた葛沢珠と言う人間を、急速に身近なものにした。

コイツはどうやつてなりたくもない大人になるんだろう。

屈折した感情ではある。少し、意地が悪いかもしない。

初めて覗いた他人の心の内は興味深いものだつた。徐々に打ち解けて隣ながら彼の心を掴めるようになり、一真は唐突に悟つた。

沢珠は、二人いる。

どちらも間違いなく本人だが、大人の冴珠と子供の冴珠がアンバラ  
ンスに、互いに混ざりうとしながら存在している。前者は一真にと  
つて奇妙な、けれど興味をそそられるズレを持ち、後者はそのズレ  
をオブラートに包んだようにして一層不思議な雰囲気を放ち、大人  
になんかなりたくないという。

自分より余程大人っぽいのに子供のままであることを願っている。  
いや、必死に成長するのを止めようとしているかのような。

電車から降りると何もかもが夕焼けに染められていた。一真是駅の  
駐輪場へ向かい、荷台に重い鞄を載せる。

家の近くの公園の傍を通り掛った時、一真是無性に切なくなつた。  
昔、ここで冴珠と日が暮れる間際まで遊んだ。あの時の冴珠はどちら  
の冴珠だったのだろう。

「ただいまー」

一真是玄関でリビングにそう声を掛け、返事を背中で聞きながら音  
を立てて階段を駆け上った。超特急で制服から私服に着替え、手洗  
いとうがいを済ませる。酷く空腹で早く腹に何かを入れたかつたが、  
坂本家では制服のまま飲食は出来ない、というより母が絶対に許さ  
ない。

朝食だろうが何だろうが兎に角食べ終えてから、制服に着替える事  
になつていて。食べ汚して制服の真っ白いシャツに染みが着いたり、  
ズボンを洗濯しなければならないような事態を避ける為だ。そんな  
坂本家ルールが出来てしまつたのは、決して一真自身の所為ではな  
いと彼は思つていて。

多分、母は兄の時に懲りたから、そういうルールを作つたのだ。  
リビングと一緒になつてているダイニングに滑り込むと、先に帰つ  
て來ていた弟が、既に夕食前の間食にインスタントの焼きそばを食  
べていた。がつつきながら日だけをちらつと上げた亮平がもごもご  
と奇妙な音を出す。一応挨拶の筈だから一真もおーだかうーだかわ  
からない声で返事をした。

「おかげり」

「ただいまー。母さん、オレもー。」

「そこの中に入ってるわ」

台所で夕食を作っていた母親が苦笑し、濡れた手で彼女自身の斜め後ろを指差した。冷蔵庫の横に置かれた見慣れた薄茶のマイバッグの口から、カップ麺が溢れそうになっている。一真も亮平と同じ焼きそばを手に取り、早速包装を破る。電気ポットから湯を注ぐと残りが僅かになった。一真是三分間の待ち遠しい時間を薬缶で水を足しながら紛らわす。見下ろした焼きそばの蓋には宇宙船が描かれていた。

かぐや姫の話をした後の宇宙船。

微妙にタイムリーだと一真是思った。

「そういうやさ、どうしてかぐや姫つて竹の中に入つてたんだっけ？」三分を壁の掛時計で計りつつ、一真是忙しく動く母親の手元を見た。人参、じゃが芋、玉葱…調理台の上にはカレーのルーのパック。今夜のメニューは自分の予想通りで間違いないだろう。

「何それ」

「竹取物語でさ月から迎えが来たのは知つてるけど、何でわざわざ地球に生まれたんだっけ」

「今更何そんな子供向けの話してんのさ」

ダイニングのテーブルの方から、まだ変声期を迎えていない少し高い声が飛んで来た。

「バーカ、竹取物語は子供向けの話なんかじゃねーよ。立派なコテンブンガクだつーの。お前中一だろ！オレは中一でやつたぞ」  
「オ、オレはまだ中学に入学したばかりだろー。古典なんてやってねーー！」

二人の会話のバックミュージックは人参がテンポ良く刻まれる音だつた。呆れたようにいつもの二人の喧嘩を聞いていた母親が、ふつと思い出したように口を挟んだ。

「罪を犯したから、じゃなかつた？」

そろそろ二分だ。

「罪？」

火傷しない様指に気を付けながら、一真は慎重に湯をシンクの端に流す。

「そう」

「何の？」

「それは書いてなかつたんじゃないかしら。軽い罪だつたとか…？」

「軽い罪で何年も地上に落とされてたわけ？」

「向こうの人にとってはほんの少しの時間の感覚だつたと思つたけど」

一真はもう忘れちゃつたという母の言葉に生返事をして、湯氣に乗せてホクホクとソースの香りを漂わせる焼きそばを持つてテーブルに移動する。

弟と同じ様に綺麗にカップの中身を平らげ、人心地がついたところでふと思つた。

（昔の人は人工衛星とかスペースシャトルから見た地球の映像なんか知らねーもんなあ）

宇宙から見た、果てしない暗闇に浮かぶ地球のはつとする程の青さや美しさなんて見られる筈が無い。ましてや地上からは煌々と輝いて見える月が、灰色の岩石で出来た不毛な土地だなどと、一体誰が想像し得ただろう。作者未詳の作品だが、もし書いた人がこの事を知つていたら、物語のストーリーは少し変わつっていたかもしれない。（あー…でもなあ）

宇宙から見た地球は確かに美しいが、その地上では醜い出来事が沢山起つていても事実だつた。人間の欲望やそこから生み出される醜さは、時代によつてそう大きく変化するものでは無い。求婚者のエピソードの中にもその人間の醜さが描かれている部分がある。そういうものを表現する舞台は、やはり月では駄目なのだろう。欲も穢れも人だからこそ。

天人の様に人の心を持たない者達が住む月では、醜い欲が渦巻くこ

とは有り得ないのだ。

冴珠こだまはバス停のベンチにぐつたりと身を預けていた。

横から差す朝日が閉じた瞼を通り越し、暗い視界に白っぽい斑点を映している。

先週の金曜に早退したが、少しの頭痛と体の重さがある以外はなんとも無かつた。ただ家族には回復し切らない体調を心配されたらしく、今朝は母がバス停まで車で送ってくれた。いつもは自転車で十五分程掛けて駅まで通うが、バスなら五分で駅に着く。この時刻だと、余裕でいつもの一本前の電車に乗れる。

冴珠はそう計算していたのだが。

バス停で駅に向かう路線のバスを待っていたら、先に到着した違う路線バスの排気ガスに胃がせり上がりつて来るような吐き気を催してしまった。

（こんなことなら、いつそ駅まで送つてもらえば良かつたかも…）最初母は駅まで送つてくれると言つていたのだ。

今更ながら申し出を断つたのを後悔したが仕方が無い。まさか排気ガスを吸い込んだくらいで、動けなくなるほど気分が悪くなるとは思わなかつた。

目の前に見慣れた制服を着た人々やスーツを着た通勤者の列がどんどんと連りだしている。冴珠は白くなりかけた木のベンチに投げ出した左腕の時計を確認した。もう直ぐ駅に向かうバスが来る時間になるが、この状態では乗れそうも無い。間違いなく環境汚染する。半ば諦めて冴珠は再び目を閉じ、じつと回復を待つていると、ふいに肌に朝日を感じなくなつた。影が落ち、閉じた視界にあつた白い斑点もすっと赤黒く色を変える。

「乗らないの？」

どこかで聞いたような澄んだ声に、億劫に思いつつ汎珠は目を開いた。光を遮った声の主を見上げる。

「……あ

見覚えのある子供だった。その子供の後ろに向かってくるバスの姿が見える。

（あーあ）

まだ、動けない。頭がくらくらする。十分後のバスが、遅刻するかどうかのデッドラインだ。汎珠はゆっくりと停止したバスが並んでいた人々を呑み込んで、再び動き出すのを黙つて見送った。バスが去ると、急に風通しが良くなつた。目の前に広がる歩道、太い車道、向かいの商店街まで、辺りは朝日を浴びて明るかつた。訪れた控えめな静寂に、人が居る故の雑多な音が随分多かつたのだと氣付かれる。

「行つちゃつたね」

バスの走り去つた方を眺めていた子供は、そう呟いた。声を掛けてきたのは早退した日に電車で隣に座つていた子だ。朝日を後ろから浴びた色素の薄い短い髪が金色に見える。先日と同じように子供は隣に腰を下ろすと、肩に担いだリュックを無造作に体の脇に置いて、汎珠を見上げて来た。

「気分悪いの？」

「……ちょっとね」

「これあげる」

少し考えるような顔をしてから、ハーフパンツのポケットから「ごそと差し出されたのは、姉が好きな銘柄のビタミンCが豊富と謳われているのど飴だつた。躊躇いがちに汎珠が受け取ると、美味しいよ、と言つて子供はもう一つ同じ飴を取り出した。黄色い包装をパリッと破り、薄い半透明の黄色の粒をぽいっと口に入れてコロコロと転がしている。汎珠もパッケージを破つて、飴を口に放り込んだ。

含んだ途端に広がるレモンの香りに、気分がすつとした。

そういえば朝はコーヒーと水しか飲んでいない。空腹感は無いが、その所為で気分が悪くなつたのだろうか。だったら間抜けだなと冴珠は思った。

隣に座つた子供は通り過ぎる人々を眺めている。その間に幾つかのバスが来たが立ち上がる気配は無い。同じ方面のバスを待つてゐるのだろうか。

「学校は駅の近くなのか？」

「今家出中なんだ」

につこりと笑う様子に、冴珠はまじまじとその子（格好から判断するに男の子らしい）を見詰めた。確かにこの子は先日、冴珠が下りた駅よりも先へ向かつていた。このバス停の最寄りの電車の駅は先日冴珠が下車した駅だから、こんな所で会うのは妙だ。

（でもあの時はどこかへ行つていただけで…その途中だつたかもしれない）

よくよく見れば、赤いトレーナーに黒のハーフパンツといつ姿は同じ気がする。だがあくまでその程度しか服装の印象は無いし、十分洗濯する時間があつた筈だ。脇には子供の体格の割に大きなリュックもあつたが、鞄は自由という学校もある。これだけでは冗談かどうか判断できなかつた。

「家出つて…夜はどうしたんだ」

「結構なんともなつてるよ。ここ三日程は冷え込まなかつたから」本当に家出だらうか。歳は一桁にしか見えないのに、家出をして数日間野宿までやつてのけた？あまりにも軽く言われ、冴珠は俄かには信じがたい。

「家の人が心配してゐるんじゃないのか」

「んー？親は大丈夫だと思つ。でも穂鳥はパニックになつてゐるかも」

「ほどり？」

「穂鳥は、一緒に住んでる同じ年の親戚の子」

「とにかく連絡してあげたら？…親も大丈夫な筈無いだろ。携帯無いなら、貸すから」

「持つてる」

「そつと右のポケットから取り出された子供用の携帯を見せられた。ぽん、と汎珠の掌に載せられた青い携帯は電源が入っていない。電池切れかと思ったが、懸念と切つてあると言われ驚くよりも呆れてしまつた。

「だつて電源入れてたら、心配した穂鳥からひつきりなしに電話やメールが入つて来るの、わかつてゐるもん」

「それは当然なんぢやないのか」

こんな子供が突然家出して音信不通になつたらとんでもなく心配するに決まつてゐる。

「穂鳥が心配性過ぎるだけだつて。そりや…もうそろそろ帰るつもりだけど」

「このバス停からなら、十番台のバスに乗れば全部駅に着くから」汎珠がそう言つと、子供は暫くしてから頷いた。

「……一回連絡入れて安心させてあげたら」

「穂鳥に？」

「仲、良いんぢやないの」

良いつていうかさ、と子供は唇を尖らせ、地面に着かない脚を前後に大きく揺らした。

「穂鳥と僕は……一人でひとつ、なんだよ。僕は……千鳥つて言うんだけど、偶々二人とも『鳥』つて同じ字を使ってあるのつて凄い偶然だと思わない？」

特別な秘密を教えるように、少年 千鳥がそつ話すから、汎珠は少し目を細めた。

「……そうだな」

汎珠の相槌に千鳥は可笑しそうに笑つた。

「本当はね、偶然なんかぢやないんだ。お母さんと穂鳥のお母さんがイトコ同士で、僕に千鳥つて付けるからお揃いにしようつて、穂鳥になつたんだつて。一人合わせて『水辺の鳥』。一人でひとつ、だつて」

(それは、偶然じゃない)

彼らの親には何らかのインスピレーションが働いたのだ。それはもう絶対に偶然ではないと何故か冴珠は強く思った。鳥を揃えるといつも発想や語呂合わせの様な名前を選んだのは、一見すると偶然だ。だが他にも「アドリとか「トリとか」選択肢は有つただろう。彼らにとつて『千鳥』と『穂鳥』という名は、きっと『相応しい』名前なのだ。

「 そんなに仲が良いなら尚更…だろ」

二人でひとつ、なんて言えてしまう程仲が良いなら。

「 面倒臭いなあ」

「 ……電源入れるよ」

冴珠が手渡された携帯の電源を入れた途端、それは鳴り出す。不在、メール、留守電と次々と画面に表示が増えて、着信が入った。穂鳥、と表示されている。冴珠は無言で携帯を渡した。受け取った千鳥が通話ボタンを細い指で押した途端。

『千鳥ちゃん…!』

(…可哀想に)

聴こえてきた甲高い声は、完全に泣き声だ。

「あーはいはい。わかつて…あー？親は大丈夫だつただろ」

スピーカーから漏れる今どこにいるの、何やつてんの、心配したんだからと言いながらわんわん泣く必死な声に、冴珠は思わず呟いてしまつた。

「 あんまり心配掛けんなよ…」

ちらつと冴珠を見た千鳥がちょっと照れたように笑つてユックを担いで立ち上がり、バス停から少し離れた。喧嘩でもしていたのだろうか。さつきはあんなに電話の電源を入れたがらなかつた千鳥の顔には、穂鳥の声を聴いて笑みが浮かんでいる。

バスが来た。気付けば冴珠の気分の悪さはすっかり回復していた。冴珠は立ち上がる。振り向くと、携帯で話しながら冴珠を見た千鳥が笑顔で、小さな手を振つていた。

世界が、酷く揺らいでいる

ここはどこだろう

何故こんなところにいるのだろう

不意に訪れた静寂

我に返った者は辺りを見回し

そして全てを思い出す

沢珠がバスに乗り込むと後部座席近くの一人掛けの椅子に座れた。一本前のバスは混んでいたのに、十分の差で随分と人口密度が変わった。駅までは五分という短い時間だが、この体調で座れるのは有難かつた。ギリギリだが走ればいつもの電車に乗れるだろう。朝日を溢れさせる窓の傍は随分と暖かい。腰を下ろしほっとした沢珠は、先ほどの千鳥という名の少年を思い出す。

（聞きそびれたな）

先日、電車のガラス越しに何かを言われた気がしたが、それも気のせいだったのかもしれない。記憶を辿つても、ここ数日のものはどこか曖昧な感触だった。

（二人でひとつ、か……）

足りないものを補つといつならば、互いに補完し合つという方法もある。

（足りない事が前提なんだ）

大切な秘密を打ち明けるような千鳥の顔。穂鳥の必死な声。相応し

い名前を付けられた子供達。通話中で同じバスには乗らなかつたが、あの子はきっと次の便で駅に向かうのだろう。

ビルに一瞬遮られた陽射しを無意識に追い求め、汎珠はふと窓に目を遣つた。そこに映つた自分の顔を見て、汎珠は目を見張る。

（…嘘、だろ）

泣いている。頬を次から次へと涙が伝つている。慌てて顔を伏せ手の甲でそれを拭つたが、込み上げるものは止まりそうにない。

（なんで…）

汎珠には何故自分が泣いているのか解らない。

苦しい？

悲しい？

思い浮かんだありふれた言葉はどれも違う。汎珠は瞼に力を籠めた。ぐつと堪えれば堪えるほど、身体の奥底からせり上がって来る何か。叫び出しそうだった。居ても立つてもいられなくなりそうな訳の解らない衝動に突き動かされそうになる。

「…ツ」

自分を押さえ込むように、狭い座席の狭間で固く身をかがめた。制服の両の二の腕にきつく爪を立てる。布に食い込む爪が齧る痛みより、胸の内が膨張するような、血腥い熱が気持ち悪い。

駅の改札を定期で突つ切り、汎珠は手洗へ駆け込んだ。天井をびりびりと揺する電車の轟音に紛れて何度も胃液を嘔吐した。冷や汗と涙と唾液が顎を伝い、ねつとりと絡まりながら水流の中に落ちてゆく。

汎珠は大きく肩で息をしながらふらふらと個室を出た。吐き気は何とか治まつた。元々殆ど胃に入つていらないから吐き出せるものは限られている。汎珠は蛇口から迸る水に焼けた喉と口腔を晒した。目の奥から響く頭痛に抗うように、汎珠は顔を上げた。白々とした蛍光灯が照らす鏡に映つた顔は蒼白だった。

一限目が終わる間際、一真は昇降口に見慣れた人影を見つけた。

（遅刻かよ……って、何か変じゃね？）

四階からでも何時もの雰囲気と違うのが見て取れた。何かを庇うような姿勢に、チャイムを待つて一真は一階に降りる。

「遅刻じゃん」

軽い調子で声を掛けた相手は靴を履き替えた所だった。

「冴珠、大丈夫なんか？」

見下ろした顔は白いを通り越して土気色だ。よくこれで動けたなと呆れる。冴珠はそのまま話しかける一真の横を素通りしそうになつた。いくら具合が悪いとしてあんまりだ。

「冴珠！」

「……？」

何かが一真の勘に引っ掛かつたが、言葉にする前に一階の職員室から降りて来た冴珠の担任の野太い声が響く。

「葛、大丈夫か。駅員さんから電話有つたぞ」

「……」

「電話？」

「駅で具合が悪くなつたらしくてな。それにしても酷い顔色だぞ」冴珠の顔を覗き込んだ教師は眉を顰めた。

「折角頑張つて来たのにあれだけ、今日はもう帰れ。家に連絡入れとくから 坂本、保健室付いてつてやれ」

辿り着いた保健室には運良く保健医が居た。一目冴珠を見た彼女は手際良くベッドを用意し、冴珠に体温計を渡して横たわるよう指示する。

一真は邪魔にならぬよう気遣いながらベッドを見下ろした。

「休めば良かつたのに」

「つむさー……」

「いつもなら無理して来ねえだろ。今日は特に大きな行事も無えし

「…どうしても来ないといけないような気がしたんだよ……」

冴珠はそう呟いたきり、そのままぐつたりと動かなくなつた。一真は溜息を吐いて仕切りから出て壁際のベンチシートに腰掛ける。

「葛くんは金曜から体調悪かつたね」

「はあ。早退します」

恐らく、土曜の補習にも出ていなかつたと思つ。一真是冴珠の姿を見ていなかつた。

「頭痛と微熱で微妙だつたんだけど帰したの。耳鳴りもあるつて言つていたから病院に行くように勧めたんだけど」

「はあ……」

一真是手持ち無沙汰に壁を眺めた。健康関連ポスター数枚に日捲りカレンダー。それに依ると、今日は四月一六日の月曜日だ。一真是この手のカレンダーがエコロジー・エコノミーの点から考えると、良いものだとは思つていないが、作つたからには使つた方がマシ。日付や曜日に加え占い（大安とか仏滅とかいうあれ）や格言めいた今日の一言、広告が小さな白紙に埋め込まれている。その中に、向かつて左の上部が欠けた少し歪な橢円が描かれていて、目を凝らすと『十三夜』と見慣れない単語が書いてあつた。

「早退してしつかり治してらつしやい。それから病院にも一度行くこと」

チャイムが鳴り響く。

カーテンで遮られた友を幾度か振り返りながら、一真是教室に戻つた。

\* \* \*

一真是この一週間、ずっと居心地の悪さを感じている。それは最初小指の先ほどの大きさしかなかつたのに、時間が経つにつれて不安に変質し、肥大し続けている。それが止まる気配は 無い。

一昨日早退した冴珠は、昨日ついに欠席した。

何か、変だ。

特にあの下駄箱の汎珠は絶対におかしい。

あれは人違いで名前を呼ばれた時と同じじゃないのか。「誰だそれは」とでも言いたげな表情だった気がして仕方ない。

そんな筈があるかと思う一方、一真の直感を後押しするように胸の奥が嫌な音を立てている。無理な圧力に歯車が軋むイメージだ。もう数日すれば、何時ものように戻っているに違いない。

一真は気休めのように、思考の合間にそう繰り返した。幾度も常識とざわめきの間で揺れ、結局昨日の夜遅くに大丈夫かと一通だけメールを入れた。

何の返事も無いまま、明日は『昭和の日』で、このままだと明後日まで顔を合わすことはなさそうだった。

(どうなってんだよ)

確かに汎珠は奇妙なズレを感じさせることはあった。成長を嫌がつた汎珠は、その癖誰よりも大人びていた。大人と子供がアンバランスに混在していて、それが彼独特の掴み所の無い不思議な雰囲気を生み出していた。

だが 付き合いの長い一真でさえも、ここまで不可解な彼は初めてだ。

汎珠が、酷く遠い存在になつた気がする。ふと肩を叩こうとしたら、腕が空を切つたというような感触だ。今まで普通に届いていたのに、見知らぬ距離が出来ている。

春に溶け込む、悲しい姿。

何かに焦がれ祈るような気配。

汎珠と距離を感じるのは、何も今回が初めてではない。あの息詰るような姿を目の当たりにすると、一真は掛ける言葉を見失つてしまふ。それは普段意識することの無い壁を感じさせられるからだ。もやもやとした分厚いものか、張り詰めた薄い皮膜かも判然としない壁だが、それは明らかに汎珠と一真を隔てている。きっと一真だけでなく、汎珠以外の他者は皆壁の外だ。

世界は彼一人を壁の内に取り込んでいる。

記憶に残るあの光景は『相応しい名前』を切望する姿だったのだろう。

だが今回は、いつもと違つ気がする。違う、というより程度の問題なのかも知れないが…。

(でもさ…本当は)

本当は ひとつ、一真は冴珠に内緒にしている事がある。

世界を隔てる壁の正体。

それは、壁の向こうとこちらを隔てる、『存在の差』だった。

冴珠と他の人間との差異を生み出す『何か』は、あの『竹取物語』を学習した時に一真の中ではつきりとした言葉になった。

冴珠は どこか遠い世界の人間なのだ。

壁は大抵忘れた頃に現れた。一真はその度に、戸惑いながらも何か『絶対的な違い』がそこにあるのを本能的に認めていたと思う。何が原因なのは判らない。けれど 多分、何かが根本的に『違う』と感じていたのだ。

言葉で冴珠との壁の感覚を言い現せた時、一真は深く落ち込んだ。何やつてんだと、自分を罵つた。

彼は異なるルールの世界の住人なのだ、とそんな言葉で冴珠を括り付けて何になる。非生産的で、無意味だ。

その一方、薄情なのか冷静なのか紙一重の結論を心中に棲む一真は「正しい」と主張している。認めたくないが出した答えは完璧に思えて、簡単には消せなくなつた。それが、自然だ。

正しい姿なんだ。

月の使者に連れられ帰つていった伝説の人のように、いつか目の前から消えてしまつても、自分はそれを当然のこととして受け入れてしまつのだ。拒絶は 不可能だ。

(沢珠はいつか、いなくなるんじゃないのか)

一真は漠然と そんな予感を抱いている。

だから沢珠の様子がおかしい事が、気になつて仕方ないのだろうか。ざわめきの正体は去り往くものを予感した故の焦燥感だろうか。

(アホらし!)

ぶちつと自分の思考を断ち切り、一真はシャーペンを投げた。さつきから同じ問題に掛かりきりで一向に先に進まない。情けない話、何度も解いても答えが合わない。

(絶対にアイツのせいだ。問題文の意味すら頭に入つて来ないなんてありえねー!)

「あークソツ!..何やつてんだ俺は!」

一真はがしがしと髪を搔き回し机に突つ伏す。目の前の時計の針は午後七時半を少し回った所を指している。もつそろそろ夕飯だ。腹が空き過ぎて馬鹿な事を考えてしまつに違いない。

気晴らしのつもりで、部屋の電気を消してカーテンを勢い良く開け放つた。

何気なく見渡した紺地の空に、一真の心臓がどきどきと跳ねる。

「おいおい…」

東の地平すれすれに大きく歪んだ赤い月が浮かんでいる。

(な…んだアレ)

十三夜、という単語が脳裏を掠める。あれが月曜の事だから… 今日は十五夜。

ぞくりと背筋に悪寒が走つた。

( アイツ、今どこだ)

一真はその時、何故か酷い胸騒ぎに襲われた。

咄嗟に携帯を手に取っていた。一真の指先が履歴を呼び出す間にもボディが温くなる。握り直した拍子に掌が汗ばんでいるのに気がつく。

(早く出ろッ……！—！)

十五夜。

歪んだ赤い月。

冴珠は今どこにいる？胸騒ぎは何の予兆だ。

無性に存在を確かめたかった。

何も無いならそれで良い。笑って誤魔化してやる。とにかく繋がりさえすれば。

「…はい」

「！オレだけビ」

不明瞭なノイズの中に冴珠の声。何か、妙に何か、掠れていた。

(一応病人だっけか？)

「……何の用？」

「いや…あのや」

「悪いけど、急ぎじゃないなら今度にしてくれ。頭が痛いんだ」「ワリイナ。おまえ今どこだよ。変な雜音入ってんぞ」

「家だよ。電波状況が悪いんじやないのか」

暗にお前こそどこにいるんだと言ったやうな口調に、チツと一真は舌打ちした。

(「こちちは三本立つてんだよ！—！）

赤黒い月明かりが部屋を浮き上がりせしむ。ソリはどーだ。俺は今どこにいるんだ？

(良く見ろ)

お気に入りのバンドのポスター。昔うつかり油性ペンで汚した壁紙も、亮平と喧嘩して付いた傷もそのまま。電波が悪いなんてあり得

ない。ここはオレの部屋でおかしな部分は何一つ無い。

「今から行くからな」

思わず口から漏れた言葉だった。

「は？ 何いきなり…」

沢珠は訳がわからないといったような、呆れたような声を出した。

「何が何でも今から行くって言ってんだよ！ 馬鹿野郎！！」

理解不能な苛立ちにまかせて携帯に怒鳴り、一真は一方的に通話を切った。

「一真！ もうご飯よ」

「ちょいコンビニ行って来る！ 先食つといて…！」

靴を履く間ももどかしく、一真は家の敷地を飛び出した。

恐いもの見たさで振り向いた東の空に、押し潰されて異様な迫力の球体。

（落ち着けよ！）

目の錯覚で大きく見えるだけだ。ついでに地平近くだと上に昇った時に較べ距離が増して、波長の長い赤しか届かないから、紅く見えるだけだ。どれもこれも月を太陽に置き換えれば見慣れた現象だ。

夕焼けや朝焼けなら歪んでようが赤かろうが何の疑問も無い。

何もおかしくない。小学生時代に夏休みの自由研究でやったから、間違い無い。

細部まで覚えておらずとも、科学で説明出来る現象だと分かっているだけで一真には十分だ。

（大体こういう理屈捏ねんのが得意なのはオレじゃねーんだよ）

心の中で毒吐きながら、一真は街灯の点いた路地を駆け出した。

この道はお互いにもう何度も通った道だ。この角を折れた数軒先に沢珠の家はある。視界に街灯に照られた見慣れた塀や門が入った途端、ほつと肩の力が抜けて一真は少し速度を落とした。

見上げた部屋は灯も点いていない。カーテンは…開いているようだつた。チャイムを押す携帯を鳴らすかを今更ながら迷つていると、突然玄関が開き沢珠の母親が現れた。手には回覧板を持っている。

「あら、一真くん？」

声を掛けるよりも早く、冴珠の母は一真の姿に気付いてくれた。

「い、こんばんわー。あ…冴珠くん居ますか」

「おかしいわね、行き違っちゃったのかしら」

「え？」

「今出たんだけど…途中で会わなかつた？あの子、約束をしてたつて…一真くんじゃなかつたのかしら」

「や、オレです！！」

一真は即答した。

「多分オレ、途中でコンビニに寄つたから、那儿で擦れ違つたんだと思ひます。すんません、病み上がりなのに」

嘘だつた。ここまでどこにも寄つていない。

「寝つぱなしで退屈してたのはあの子の方よ。こっちこそ悪いわね。遠回りして羽伸ばしてるんじゃないかしら」

「戻つてみます。多分、いつもの公園にいると思つんで。どんな格好つすか」

「確かに…グレーの長袖のTシャツだったと思つわ。あの子つたら上着も着ないで出てつちやつたのよ」

一真是元来た道を途中で折れて件の公園へ向かつた。そこは昔良くな遊んだ住宅地の中の小さな児童公園だ。遊具はブランコと鉄棒と滑り台と鉄棒だけで、後は一瞬でドッヂボール、サッカー、野球といったゲームのグラウンドに早変わりする土の広場が広がつていて、縁取りのように点いたライトが木々に囲まれた空間を所々照らしている。一真がここに常連だつた頃と殆ど変わっていない筈の空間は、日が落ちると途端に見知らぬ顔に変わり、随分と素つ氣無い気配がした。

誰もいない。

それは一真がある程度予想していた事だつた。

冴珠の母親は「会う約束」の相手に一真を想像したらしかつたが、先刻の一真の一方的な電話は、その「約束」では無いだろう。

一真は公園を突っ切り、大通りに通じる並木道に向かおうとした。殆ど散り終わる寸前の桜。花弁が緑を帯び始めた土の路肩に積もっている。足元の黒いアスファルトには落ちたばかりの白いものから、踏み躡られて褪せたものまで好き好きに散りばめられていた。両脇に立ち並ぶ樹木の陰が、暗がりとこの世界とをぼんやりと区切る。公園の出口に差し掛かつた所で、一真是既に葉を茂らせつづある桜と水銀灯が作り出した薄闇の少し先に、人影を見つけた。

（子供…？こんな時間に何やつてんだ）

一真に背を向ける格好で道の真ん中に立っていたのは、白いパークーを羽織った少年だつた。上着の白が辺りの少ない光を反射して目立つてゐる。この子に冴珠らしい人がここを通らなかつたか尋ねようか。時間的に冴珠が家を出たのと自分が追いかけ出したのとに大した差は無い。見掛けている可能性はある。宛ての無いまま公園に来てしまつたが、何か手掛けりがあるかもしねりない。

そう一真が判断し、声を掛けようとした所で、その少年は足音に気付いたらしく振り向いた。利発そうな一対の瞳。一真是その少年の雰囲気が、どこかで見知つているものだと思った。

「ちょっと訊くけどさ、この辺でグレーのシャツ着た高校生位の男、見なかつた？ 身長はこの辺で」

一真是手で自分の顎より少し上を示す。少し首を傾げた小さな子供は澄んだ声で言った。

「さつきの人かな」

「サンキュー」

同一人物かどうかは判らないが、可能性は高い。

「…おい」

子供の脇を足早にすり抜けようとした一真から、低い声が漏れた。腰辺りまでしか身長の無いその子供がシャツの裾を掴んでいる。一真是しゃがみ込み苛立ちが面に出ないよう意識しながら、告げた。

「今遊んでやれねーんだよ」

「バス停つてどっちですか？」

困惑する一真を見て、子供の夜目にも茶色い瞳が少し笑つた。

「迷子つて言つたら、お兄ちゃん、バス停まで送つてくれる？」

「迷子？」

少し俯き加減の口元が内容とアンバランスに笑みを浮かべている。

一真はむつと顔を顰めた。

「…ケーサツ一緒に連れてつてやる。交番か

「そこまで行けたら、帰り道はわかるんだ」

「つーかまず親に連絡しろよ。携帯ねーの？」

「内緒だよ。迷子になつたなんてばれたら、暫く遊びに出られなくなりそうだし。八時までに駅に着いてたら間に合つんけど」

「ワリイけど、急ぐんだよ。この道真つ直ぐ行つて、郵便局の角で右に折れたらすぐ大通りに突き当たる。そこを行つたらバス停有るから、十番台のヤツに乗れ」

普段の一真ならバス停まで送つてやつた筈だ。だが今回だけは勘弁して欲しかつた。こうしている内にも冴珠を見失つてしまふかもしない。今ならそれ程離れていない。大急ぎで探せば見つかるかもしないのに。

一人きりで迷子になつても、一真のよう『デカイ男に物怖じしないならひとりで行かせても大丈夫だらう。最近変質者が出た噂も聞かない。そもそもこの落ち着き方は本当に迷子か怪しくないか。心の中で幾つかの声が湧き上がり方向が決まる。一真は駆け出そうとした。

が、振り向いた先、少年が薄闇に取り残されるのを見てしまつと黙目だつた。

(クソつ)

「一緒に行つてやるよ」

取つて返し、急げと小さな手を引き、一真はずんずん歩き出した。

少年は驚いたようだが泣き出さず、一真はほつとした。

「何で急いでるの」

「人探してんだよ」

「友達？」

「そう」

「どうして探してるの」

「とりあえず一発殴るため。約束破られたら腹立たねえ？」  
少年が約束してたの、と弾む体に合わせ咳いた。一真は一方的にな、と前を見たまま応える。

「それに何か変なんだよ、今。普段と違う」

風が街路を吹き抜け、辺りの葉桜がざわざわと音をたてる。その度に淡い光が変幻する影を生む。目には見えぬ独特の香りの濃淡。やがて郵便局の橙色の看板が見えて来た。

「無理して感じがする。おまえ仲の良い友達いつか？」

「おまえじゃなくて千鳥。 いるよ」

「そいつがある日突然別人みたいになつたらどうだ？」

引き摺られて駆け足になりながら、千鳥は器用に首を傾げた。

「通じなくなるつづーか。目の前で急にドア閉められるみたいな。ムカツとこねえ？」

言つていて一真是自分が随分苛立つていた事に気付かされた。千鳥にも思い当たる節があるのか、嫌そうな表情をしている。

「…その友達といて楽しい？」

「……多分そういうのは年齢関係ねーよ」

視界が開けた。大通りは人工の光に満ち人の顔も十分判別できる。低空の月はきっとまだ紅く歪んだままだろう。一真是足を止めずに捜索の視線を辺りに投げながらバス停に向かつ。振り向いてはいけない気がした。その内背の低い千鳥にもバス停が見えた様で、千鳥は掌を解いた。

「送つてくれてありがとう。お礼に」

「いいよ、んなもん」

千鳥がにこりと笑つて通りの向かい側を指差す。つられて一真是首を捻る。行き交う車両や人々の中に紛れて見慣れた姿が 足早に先の角を折れた。

「チャンスだよ。じゃあね」

千鳥は折り良くやつて来たバスに駆け寄り、ふわりと飛び乗った。バスの車体が低い唸り声を上げて戦慄く。一真が再び振り向くと、もうそこに千鳥を乗せたバスの姿は無かつた。

水の膜が張られたような薄闇に、僅かに赤味を浮かばせた黄金の月が出ていた。満ちた月はじつとりと滲み、その光彩で夜空を浸している。

その光を受け背を丸め蹲る獣の姿のよつ、樹を生い茂らせている小さな山。麓の色の剥げかけた鳥居が夜の色に紛れながらも薄く浮かび上がる。その先、うねりながら続く不揃いな灰色の石段は中程から木々の影と闇に呑まれ、天辺の小さな鳥居の元に続いている。暗い森に守られたそこは、流れてゆく時代に逆らつてすらいるようだ。聖域。

人はその場所をそう呼ぶ。

空の月影は禍々しさを潜ませ、ぼんやりと光る淵が虹色の輪を幾重にも描ぐ。

月の光を反射する石置に影が伸びた。

山の低い頂に月。そこへ、ほのかに白く伸びる階。

少年は鳥居の少し手前で立ち止まり安堵したような笑みを浮かべた。懐かしい我が家に向かうよつな、棲み慣れた場所に帰るよつな。彼は足を踏み出した。

その足取りに迷いは無い。

月に還りゆく物語の使者達のよつこ。

やつと。

わたしはやつと還ることができるのだ。

自分を呼ぶ声がする。あの人の許に

わたしはあなたに還る。

もう一度わたしの名を呼んで下さい。わたしを私たらしめているのはあなたの存在だけだ。わたしに命を与えてくれるのは、あなたのその息吹だけ。

わたしはあなたに還る。

だから今すぐあなたの声でわたしを呼んで。

『それでいいの?』

誰かの声。遠い記憶の奥底から、心搖さぶるよつて問い掛けるのは  
誰だろう。

『お前はそれでいいの?』

幾重の問いかけも、やがては反響しながら消えてゆく。  
残つたものはただ、空漠としたこの世界。  
さみしい。

渦巻く孤独は混沌と混ざり合つて誰のものかも判別できない。

ここは淋しい。

ここにいても満たされることはない。

唯それだけは確かな事実。

迷うことは何もない。

かえりたい

はやく、あの場所へかえりたい

大通りから逸れると途端に灯の数<sup>あかり</sup>が減る。点在する街灯と店から漏れる灯、そしてあの少し暗い月光が一真の視力を支えている。

あれは沢珠あつても、自分の知る沢珠ではないのかもしれない。

一真は沢珠（だと思われる）を追いかながら、ちらつとそう考えた。

向かいの歩道を指さした千鳥。見間違える距離でも無いし、見間違えたとも思わない。千鳥が一真の前に擦れ違つたのは、やはり沢珠だつたという事なのだろうが…本当にあの人の影が沢珠なのか、確証は無い。試しに携帯を掛けてみたが電波が通じないと拒絶する女性の声が空しく繰り返されるだけだった。

千鳥は不思議な印象の子供だった。

「なんでオレの前に通りかかったヤツに声掛けなかつたんだよ。急いでたんだろ」

「掛けたけど、聞こえてなかつたみたいだよ」  
おまえ本当に迷子か、と公園から伸びる街路樹の下を半ば駆け足で通り過ぎながら一真は問つた。

「帰る所はわかってるのに、帰るみちが見つからないのは迷子じゃないの」

千鳥は真っ直ぐな視線で一真を低い位置から見上げてくる。

「紛う事なき、迷子でしょ」

その時にわかつた。

初対面なのに見知つていたような気になつたのは、妙に大人びた言い回しをしても違和感の無い雰囲気が友人にそつくりだつたからだ。横断歩道の青信号を待つ間に少し距離が広がつてしまつたが、見慣れた後姿は頼りない街灯でもすぐに判つた。汎珠の足取りはしつかりとしている。

（オレ、大丈夫か？）

一真は普段なら絶対にしない馬鹿げた行動を取つてゐる。

人違いだつたら骨折り損だ。本当に唯の散歩なら、それを後ろから切迫感すら伴つて追いかけている自分は、ちょっと危ない人に思われても文句は言えない。

一真にしては珍しく幾つもの自虐的で否定的な言葉を思い浮かべそれでも足を止めなかつた。

今汎珠を捕まえられなければ　自分の知る汎珠ではなくなつてしまふ。

この馬鹿げた予感をどうしても振り払えなかつたからだ。  
誰よりも大人びた幼馴染。

大人になんかなりたくないと言つた子供。

以前から一真は二人の『汎珠』の気配を感じていた。

だが今、汎珠を追いかける理由は彼の奇妙なズレや、壁によつて突

き付けられる『存在の差』による別離の予感では無い。

(あれはアイツじゃない)

今の沢珠は慣れ親しんだ一人の内のどちらでもない気がした。今の沢珠はは

迷路の中で偽りの出口を見つけた迷子だ。

相応しい名を欲した沢珠。自分を擦り抜ける名を受け止められずに孤独は募る。それはきっと存在そのものを根底から齎かす威力を持つている。迷宮に迷い込んだ子供は漸く辿り着いた出口に縋りつくだろう。寂寥と微かな希望で目前の扉を無条件で開けてしまう。それがたとえ沢珠が求める『本物』の扉ではなかつたとしてもだ。

(おまえ、どんな扉を開けたんだよ)

常に無い切迫した様子を見せたり、丸きり一真に気付かなかつたり。意思疎通が困難になつて、しまいには一真が今から行くと言つたのに約束をすっぽかして外出。

(普段じゃありえねえだろ)

あれは一真の知る沢珠では無い。

一真はそう信じたい。

既に直観では確信している。ただそれがあまりにも根拠の無いものだつたために、一真は慣れないと言葉遊びで自らの正当性を保証せようとしているのだ。

一真には今、沢珠がどこを指しているのかなど畠田わからない。ただここで見失えば、沢珠は一度と成長しない子供の姿のまま消える。共に居た沢珠は現実世界において消滅したも同然だ。

そして　　当の沢珠は未だそれを望んでいない。

一真はそう思つてゐる。

人は傲慢な錯覚と嘲笑うだらうか。

だが一体誰が彼の心の内を理解しているのだろう。きっと誰にもわからない。ならば自分の声に従うべきだ。一真はそう言い聞かせる。こんな冗談のような別れ方は嫌だ。沢珠が己で考え、選択した道を歩むのを見ていはない。

(オレの答えはこれでいいんだ)

まだ、彼といたい。馬鹿な話題で騒いで、時々思い出したように腹を割つて話をしたい。

どんな風に冴珠が恐れていた大人への道を歩み続けるのか。どんな生き方を選択するのか見ていたい。ひとりの人間として、あの不思議な友人がどう生きるのか。その彼の人生の中で、出来るなら掛け替えの無い友人として繋がつてみたい。

冴珠を、失いたくない。

足早に歩いていた冴珠が、終に駆け出す。その何かを振り切るような後姿に一真は腹を括つた。

どこへ行こうが、関係無い。

迷つてなるものか。

（絶対こっちに戻らせるぞ、オレは！－）

そのまま進むのか、途中で方向転換するのか。それは未来のみが知つていて。

点々と暗い歩道に落ちる灯は冴珠をどこへ誘おうというのか。駆け出した人影に迷いは無かつた。ジョギングなどという可愛いものでなく、全力疾走だ。一真はまさか高校生にもなつて真剣に追いかけっこする羽目になるとは思わなかつた。久々に走つた所為で息が切れ、目の横が脈打つている。高校受験で落ちた体力を一真はまざまざと実感させられた。

（こんなことならさつさとバスケット部でも入つときや良かつた！）

行き先が判れば待ち伏せする手もあるが、この状況では素直に後を追うか捕まえるしかない。

進路は大まかに見て南東だが、この辺りの地理感覚が一真には無い。冴珠を追う内、その行く手に見慣れない暗色の塊が平坦な大地の中から盛り上がりしているのに気付いた。校舎程の高さだ。森の様な塊の背景の低空は地平に沿つて人工の光で白んでいるだけに、余計に黒さが際立つていて。

ふいに冴珠の足が緩みその動きを止めた。一真はその隙に距離を縮める。塗装の剥げかけた板が冴珠の佇む細い道の口に立てられていて

るが、一真の所からは何と書かれているのか見えない。

冴珠は、その細い道へと折れた。

「どこだよ、ここ」

流石に荒れる息を宥めながら看板と辺りを見回し、一真はうろ覚えの周辺地理と自分の通つた道とを照合させる。滅多に来ない街外れだがここまでほぼ最短距離でやって来たらしくと推測できた。

（…ここって）

一真は腕で額の汗を拭う。

今しがた冴珠が折れたその細い道は、先刻からずっと見えていた黒塊に突き当たり、行き止まりになつていて見えた。街灯は減つたが道に覆い被さる木々は無い。数少ない街灯と自然光に頼つたモノクロの視界だが、十分見える。

冴珠はゆっくりと小山に続く道を歩いていく。後を追う一真の存在にはまるで気付いていないようだ。道は途中から白っぽい石畳に覆われていて、その先の山の麓に色の剥げた小さな鳥居が立っているのが一真の目に付いた。

（神社…でもここ、本当は古墳じゃなかつたつけ…）

古墳と神社が一緒に有的はそう珍しくはなかつた筈だ。確か地域学習でこの山の上には小さいが古い古墳ある と紹介されていたと思つ。

さつき見た看板の字は殆ど消えて読めなかつたが、見た事がある気がしたのはその所為かもしれないと一真は足早に距離を詰めながら考えた。

冴珠が鳥居へと続く石畳で立ち止まつた。一真と冴珠との距離は五十メートルもない。駆け寄りうとした一真は、寂れた小さな赤い鳥居の前、身動きもせず立ち尽くす背に一瞬、拒絶を恐れた。

あの不思議な壁が 世界を隔てていた。

今冴珠はひとり、誰もいない世界にいる。見覚えのある密やかな光景が、確かに存在した『止めなければ』という想いを嘘のように鎮めてしまっている。

沢珠は…本当に一真が思つよつて、ここから去る」とを望んでいいのか？

(本当は)

ザアつと一真の後ろから風が吹き抜けた。しんとしていた辺りの木立が揺れる。葉と葉が擦れ、鈴の音のように鳴つた。水分を含んだ重い風は可視の波に姿を変え、麓から頂までの木々の枝を震わせうねりながら這い登る。小さな椀を伏せたような山全体が、春の夜風に落ち着き無くざわめいている。

誘われるよう、一歩。

一真是自分がどうしたいのかを決め兼ねたまま、動き出した沢珠を視線で追つた。そして気付く。彼らの足元の石畳は山頂に向かつて伸びる細い階段に続いていた。薄闇の中曲線を描く参道は中腹で暗い木蔭に消え、山の頂の少し手前で再び姿を現している。

一真是沢珠につられて足を動かした。

これでは彼に追い付けないと理解していくとも、自分の正当性を主張仕切ることが今更になつて出来なかつた。

(本当は ずっと)

一真是足元から頂上まで道を田でなぞり、はつと息を呑む。月が、あつた。

山のすぐ上に浮かんだ不気味に輝く月。滲んだ月は何色とも形容しがたく、黄味を帯びた薄い光を空へ振りまいている。山が一層黒々として見えた。山を這うあの階段はまるで 月への道だ。

今宵は 満月。

ざわつとした胸騒ぎが強く甦る。

(ふざけんたこと考へんな!)

一真が山のすぐ麓に立つてゐる所為だ。偶然だ。月がこの小さな山のすぐ上に見えるのは距離と角度と方角の問題だ。

言い聞かせるそばから良く知つた昔話のフレーズが溢れ出す。

## 月から迎えが

頭の中が変になる。耳の奥で心臓がドクドクと警鐘を鳴らしている。一真が視線を奪われているその間にも、また一步冴珠は月に近付いていく。気付いた時には冴珠の姿は鳥居の真下にあった。

（そつちに行くな！）

勝手に体が動いた。理屈も理由もかなぐり捨て一真は必死で走っていた。

冴珠を行かせてはならない。山の上へ、あの月へと続くぼんやりと光る石段を昇つてしまつたら、もうきっと戻つて来ない！一真の鼓動がそう喚いている。

「冴珠！」

見慣れた後姿。振り向かないのは聞こえないからか、ここには戻らないという意思の表れか。

（どうでもいいんだよ、そんなことは…）

昂然と頭を上げた冴珠の脚がゆっくりと、切り立つた石段に掛けられる。流れるような動作に目眩がしそうだ。

あと数メートル。

（おまえ自身の意思だつたとしても構つもんか！行くな！…）

「冴珠！」

幼馴染に向かつて伸ばした腕。一真の指先が掠めるように冴珠の肩に引っ掛けたと感じた瞬間。

「ツ！…！…め…！」

届いたと思った腕は凄まじい勢いで払われた。だが弾かれた痛みは、思わず睨み付けた先の冴珠によつて忘れさせられた。冴珠は身を捻り片足を段に掛けたまま、無言で一真を見下ろしている。すぐ後ろに覆い被さる樹木の深い闇。それを背負つた冴珠の瞳には何の感情も浮かんでいない。

「おまえ、一体どうしちまつたんだよ！…何やつてんだよ！…」

風に共鳴するざわめく森が冷氣を震わせ一真の声を飲み込んだ。応

えは無い。そのままふいと汎珠は身体を反転させる。

「待て！」

放すまいと一真はその腕を懸命に掴んだ。不揃いに切り取られた石を積んで造られた階段は狭く、一段一段が高い。その階段で二人は揉み合いになつた。足場と視界が悪過ぎるのに加え、どうしても一真の理性が手加減をしてしまう。だが汎珠には迷いは無かつた。体勢を崩しかけた一真に汎珠はすかさず上段から横面を狙つて腕を薙ぎ払う。咄嗟に身体を捻り腕で目をガードしようとしたその瞬間、一真の血の気がざつと引いた。退いた足が空を踏む。ガクンッと後傾する身体。

致命的なミスをしたと本能が叫ぶ。

落ちる！！

完全に身体のバランスを崩した一真は、石段から落下するのを反射的に覚悟した。

虚ろな光を浮かべる汎珠の両眼が、手を伸ばす一真の姿を映している。

（汎珠！）

その刹那 ドンッと一真の肩に物凄いプレッシャーを持つ何かが圧し掛かつた。一瞬目の前がカツとなつて一真の全ての感覚が吹き飛ぶ。

「！！」

何か、が一真の体を動かしていた。

白く灼き切れそうな視界。左目に走る痛烈な熱。汎珠の眉間に射抜く右手の人差し指。

ゆらり。

異様な光を宿した汎珠の瞳がゆつくりと瞼の裏に沈みゆくのを、一真は他人事のように見ていた。力を失った汎珠の体が前のめりになり一真の方へ倒れ込む。一人はそのまま縛れ落ち、冷たい石の道に寝転ぶ羽目になつた。

月は全て見ていた。

ふたりは「こいつ」とした石畳の参道に倒れ込んでいた。

「つて」

下敷きになっていたのは一真だ。取り敢えず肘を突いて身を起したが、別の生き物になつたように身体がどうしようもなく重い。長い間水中にいて、急に陸に上がつた時に似ていた。

身体の上の汎珠は青白い瞼を閉じて、ぴくりともしない。

一真の背中や腕は多少痛むが、酷い怪我をしてこることは無やそうだ。

腹の上から押し退け、石畳に転がした汎珠の様子は未だ判らないが、一見して特に外傷は無い。揉み合つた場所がそれ程高くなかったおかげだ。

だが階段を見上げると、その先はやはりぼっかりと空いた闇に飲み込まれている。

「……行かなきや……」

はつと一真がその声に気付く。

天を仰いで寝転んだまま、焦点の合わない瞳をした汎珠が

咳く。

「……行かなきや

ぎくりと背筋が震えたのは押し隠した。

「黙れ」

一真は汎珠の頬を軽くはたくと重い身体を叱咤し、ふらふらと立ち上る。獲物と多少揉み合いながら、神社のすぐ近くにあつた公園までそれを引き摺つて来た。

「てめえ、いい加減にしどけよ

なお動こうとする汎珠に今度は容赦しない。

子供の忘れ物であろう小さなバケツで水道水を頭からぶっかけ、ベンチにどさつと座らせる。漸くおとなしくなつたのを確認し、一真もその隣に腰を下ろした。

「…オレって結構面倒見いいよな」

一真はベンチの背凭れに伸びた。水銀灯の清冽な白光が公園を守つていて。見上げた月も白い光に変わっていた。

少し離れた国道から車の走る音や、木々を揺らす風の音が時折聞こえる。決して静かではないが、落ち着いていてホッとする空間だつた。

(さつきの怖い　赤い月が嘘みてえだな)

そう思いながら右隣の冴珠を見ると、ゆるゆると顔をあげた。瞳はどこか夢を見ているような弱い光を灯していたが、徐々に意思を持ち纏まり始める。

「あ…カズ？」

冴珠は一真をやつと認識したらしい。何でこんなとこにお前がいるんだ？　というような、不思議そうな声だ。

「大丈夫か？」

「……何言つてんの？」

いつもの調子だった。

お前、何やつてんだと呆れるような、いつもの冴珠の声だった。知らず強張っていた一真の肩の力がかくつと抜け、思わず目の辺りが滲みそうになる。一真はそれを隠そうと声を荒げた。

「最初の言葉がソレかよ。信じらんねえヤツだな！」

今一現実に戻り切れていないのか、冴珠は辺りを見回し、首を傾げた。

「信じられないって……！」

「街外れの公園」

「何で？」

「おまえを追っかけて来たせいだろ」

「は？　別に来なくても良いだろ。っていうか…何で俺こんな所にいるんだ？」

「知るかよ馬鹿野郎！」

「大声出すな」

ウルサイ、と顔を顰める冴珠に流石の一真も堪忍袋の緒が切れた。

「オレが知るかよ！おまえがおかしくなつちまつたからだろ！！」

冴珠は正面から肩を強く掴まれ、呆気に取られた。

「何とか言え……」

一真の指が肩に食い込んで 痛い。だが一真にぶつけられた怒りに対する戸惑いの方が大きく、冴珠は振り払つて躊躇つた。生じた痛みはやがてそこからじわじわとした熱になり、身に沁み込んでゆく。

安心感とでもいうのだろうか。

他者と繋がる熱にふつと穏やかな気持ちになつて冴珠は力を抜いた。

「月が……鳴つてるんだ」

冴珠の唇から零れたのは謝罪ではなく、そんな言葉だつた。

一真が怪訝そうにするのを見て苦笑いが漏れる。冴珠は仰のき、高天の月を見遣つた。

「最近……四月の頭くらいからかな。最初は耳鳴りだと思つてた。鈴みたいに……夢の中でも起きてる時でも……唐突に鳴り出すんだ。錯覚かもしれないけど 俺にはそうは聞こえなくて。今日もお前の電話の後、偶々窓の外を見たら大きな赤い月が出ててさ。そしたら鈴の音が大きくなつた」

「その月なら俺も見た」

「そうか……」

「すげえ怖かつた」

「怖い、か。俺は 音がどこから響いてるのか知りたくて仕様が無かつた」

「月から、なんだろ」

「今日知つた。今まで解らなかつたんだ。気付いたら外に出て、音を追つかけてた。おかしいだろ？たかが鈴の音なのに……追いかけたんだ。必死で」

一真は月を背にして冴珠に影を落としたまま、黙つて耳を傾けている。

「ただ、それだけだ」

目を伏せた汎珠は右肩を掴むその手に触れた。

食い込む指先から伝わる熱。

日常世界の流れに戻ったのだ。互いの体温が今ここに確かに存在していることの証明だ。

「もう、大丈夫だ」

溜息と共に一真はゆっくりと指を解き、ビセリとベンチに腰掛けた。汎珠は静かに月を見上げる。

「あの音は…凄く身近で、俺に馴染んでる音だと思つたんだ。懐かしいつて」

昔聴いたオルゴールの螺子を久々に回し、メロディーが流れ出した時のような。胸がほつと温かくなる音色。誘われる様に後を追つた。それは次第に大きくなり、ただの鈴の音か、自分を呼ぶ声か、それとも全ては錯覚で、何も無いのかすらわからなくなつた。

「気付いたら月を見てた。月から聞こえてくるんだって、やつとわかつた。月が俺を呼んでたんだ」

限りなく降り注がれる鈴の音は月への道標。

「それであ…月が呼んでる音なのかつて思つたら」

「思つたら?」

一真が顔を正面に向けたまま、ちらりと汎珠に視線を向けた。汎珠は静かに息を吐いた。

「馬鹿みたいに安心した」

だから汎珠は足を踏み出した。あの音の先に口が欲して止まないものが存在している気がして。

（満たされていた）

あの鈴の音のする月に、汎珠は確かに満たされていた。

「動物みたいだけど、帰巣本能って言うのかな。行くのが当然で、疑う余地なんか存在しなくて、ああこっちだ。自分の場所だつて」訪れた沈黙の中、天を見上げたままの汎珠の瞳からぽつりと滴が伝う。

「どうしても行きたかった。具体的な場所なんてわからないけど。  
それでも あそこにかえりたかった」

あの音の響く処に還りたいという渴望。千鳥と出会った後、込み上げた衝動の正体はそれだった。

帰りたかったのだ。どこか、自分を呼んでくれる人の元へ。

それを見つけている彼らが途轍もなく羨ましかつたのだ。

唯一人で良い、心の真中まで呼んで欲しいと願い続けている自分。冴珠の欲するものを、それが無いが為の恐怖や孤独の気配を知りもしない子供達が、当たり前のものとして簡単に享受していた。

あの抑えがたい激情は 嫉妬だ。

「後悔してんのか」

冴珠はそつと瞼を下ろし、唇が笑みを刻んだ。

「今日の事は…『ポンピンプレー』だよ」

「…意味無いなんておかしいだろ。おまえにとつては、意味無えもんじやねえだろ」

「お前がそんなんだから」

冴珠は苦笑する。美鈴との一件があつた頃の事だ。自分を誤魔化せなくなつた冴珠は神経を尖らせ、その名前に身構えるようになつた。呼ばれる度に、おまえはそこにいないんだと宣告されている気がした。名前の違和感は冴珠の存在も居場所も否定していた。

それでも冴珠が絶望し切らなかつたのは、彼を取り囲む家族や友人という近しい人々が、冴珠の名を真つ直ぐに呼び続けたからだ。心が受け取れない名であつても、他意は存在しなかつた。在つたのは殆ど無条件の親愛の情だ。

ただそれだけが救いだつた。

それ故の葛藤や苦痛もあつたが、彼らは満たされない『冴珠』を丸ごと受け入れて、呼んでいた。だからこそ冴珠は、己の存在を否定しようとする自身やあの魔物を押さえ込んでこれたのだ。

「何だよ」

「さあ何だろ？」「

「はぐらかすな。今も行きたいと思つてんのか」

「……いや。きっと怖いんだ、あの先に行くのが。鈴が聞こえると自分が何か別のものになりそうな変な感じがしてたんだ。でもあの音を聞いたら」

沢珠はゆるく首を振った。

「行かなきやならないと思つたんだ」

一真は田を細め爪先で幾度か固い土を詰つた後、漸く口を開いた。

「それは 今じゃねえと駄目なのかよ」

「今？」

「まだ時間はあんじやねーの。そんなに急いで行かなきやならないのか？」

「わからぬ」

「なら、もう少しゆづくつしてけよ。おまえが満たされたんに何が必要なのかわからんねーし、居心地は良くないかもしんねえけど、こもおまえの居場所だろ。違うか？」

沢珠は田を見張り、隣の一真をまじまじと凝視した。

「うわ…クサイ科白」

「おまえな…」

一真の首ががくんとベンチの背凭れの向い方に落ちた。器用だな、と沢珠は呟く。

「でも有難く戴いておくよ。楽になつた」

「素直じゃねえの」

「当然知つてるだろ」

「存じてますともー おまえ、最近凄く焦つてたぞ」

「そんに、か？」

何かに急かされるよう感じていたのは事実だが、それ程酷かつたかと沢珠は訝る。

「らしくなくなー島田さんも氣にしてたぞ」

沢珠がちょっと顔を顰めた。失態だと思つてゐるに違ないと一真は想像する。

(らしくねえ、か)

自分は沢珠の何を知り、何を理解しているというのか。所詮は全て想像に過ぎない。だが一真は言わずにはいられなかつた。

「もう暫くこっちに居るよ」

時が来れば、きっと何かが起るのだろう。何が訪れ、何が変わり、自分達の関係がどうなるのか知る手も無い。だが彼は『ここに居る』という選択肢を選んだ。行かなかつた。

「まだその時じゃないんだる。おまえは決めたら変えねえの、オレは知つてゐる。そのおまえが今ここにいるんだ」

この友人を失いたくない。ただそれが伝わつて欲しいと思つ。

「……」

白く滲んだ月を無理な体勢で見上げたままの一真。沢珠も天を見上げた。

天上の月は満ちても、ここは何かが欠落している。

どこで満たされるか、線を引くのは己であり、沢珠は未だその線を引けない。だが満たされないこの世界は　自分が存在する確かな場だつた。

「ここも俺の居場所なんだ。だから」

言い聞かせるような言葉は、果たして誰に向けられたのか。

「ここに、いる」

沢珠はゆっくりと立ち上がつた。一真是仰け反らせていた頭を起こす。普段とは逆の位置で二人の目が合つ。顔を見合わせ、どちらからともなく噴き出した。

「帰ろう」

「……全く、迎えに来た相手に向かつて何言つてんだか」

「行くなつて言つたくせに」

「おまえがあんまりにも変だつたからだ」

「知るか、そんなの。ところで…何で服が濡れてる訳? 寒い」

「おまえが悪い。水掛けるまで正氣じやなかつたぞ」

「まだ寒いのに、もう少し方法があるだる。後先考えずに動くのは昔つから変わつてない」

「正氣付けてやつたんだぞ！兎に角家に帰つたら真つ先に風呂に入れ」

「わかつてゐる。俺だつて懃々風邪引きたくないし…ああ寒い。

それがあちこち痛い？」

「氣のせいだ」

一真に向けた冴珠の目がすうっと細められる。

「お前……さては殴つたな？」

「お相子だらうが！！」

やりやがつたなと冴珠が拳を固めるのを見て、一真は腕をバツと捲くりあげた。

「見ろ！」

まだアザは出来てないが所々赤い箒だ。明日辺りきつとヤバイ。勿論冴珠と遭り合つたり石段から落ちた時に出来たものだ。

「暗くて見えない」

「ざけんな……おまえ本氣だつたぞ！」

いつもの会話。いつもの一人。お互い少し饒舌なのは月光の所為だ。他愛ない会話の途中、冴珠は白い月をちらりと振り返つた。

（まだ時間はある、か）

考えもしなかつた。もう今しかないと思つていたのに。

今夜の事を上手く説明できなくとも、何かが訪れる予感はある。それが姿を現すのは時間の問題だと冴珠は思つた。確かに、月は彼を呼んでいたのだ。ここに還つて來い、と。月へと続く道は、今度いつその扉を開くだらう。その時自分はどうするのだろう。再び閉じるか、踏み出すか。ひとつ確かな事は、時が満ちれば必ずと踏み出す事を選ぶだらうということだった。他の誰かの為で無く、自分自身が満たされるために。

だが満たされることに不安が無いわけではない。

冴珠はあの幼い春に、終わり無き自問自答の世界を選んでしまった。自身の記憶のある範囲では、『葛冴珠』は足りないものを求め続けている。満たされてしまえば……もう、それは自分ではあり得ず、全く別るものになってしまったのだろうか。

(解らない)

満たされたその結果がどうなるのか、その時にならなければ誰もわからない。

その選択の時までは。

(イイにいよ)

己に与えられた、このどいかあやふやな世界に。

「何やつてんだ？早く帰らないとおばさんに心配されるぞ」一真は立ち止まってしまった冴珠を振り返る。普通に歩けば半間程掛かる距離だ。我ながら良く追いかけたと一真はしみじみ感心した。「平氣だろ、この時間なら」

「……言い忘れてたけど、明日の放課後、矢野さんの歓迎会やるぞ」

「ふうん

「来んだろう

「行くよ」

冴珠はさらりと頷いた。その自然な動作に、一真は言いそびれた自分が可笑しくなった。

「星…あんまり見えないな」

「男と見て何が楽しいんだ？やっぱ美人のお姉さんと、こう腕を組んで」

「茂みに連れ込んで狼になる、と。それでお前は立派な犯罪者だ。オメデトウ」

「何でムードを楽しむって発想になんねえの。ロマンチックにだなあ」

「ロマンチック？似合わない。全くお前には似合わない」

「失礼もそこまでいくと返す言葉も失せるよ……」

「静かになつて良いじゃ ないか」

笑いながら冴珠は一真の隣に並んだ。足音が一つ響く。

「…いいんだな」

前を向いたまま一真が確認の言葉を吐く。

「いいんだよ。帰るんだ」

月光に照らされた冴珠は驚くほど穏やかな表情をしていた。歩いている内に辺りの景色は徐々に見慣れたものに変わる。一人の前に冴珠の家の屋根が見えてくると、足が自然と速くなつた。

「…早く風呂入れよ」

「…明日俺が休んだら間違いなく誰かさんのせいだから」「つたぐ、誰のせいだってんだ」

「カズ」

「ああ！？」

「…一真」

喧嘩腰になりかけた一真は、冴珠の声音に動きを止めた。

「なんだ？」

少し俯いた冴珠は、いつもより小さく見える。

「お前には感謝してる」

思わずぽかんと口を開けた一真に、冴珠は照れたような笑みを唇の端に隠して言葉を続けた。

「今日は本当に」 ありがとう。良くわかんないけど… お前が止めてなきや今頃俺はもうここにいなかつた。これから先にまた同じ様なことが起こるかもしれないけど」

近い未来、現実になると確信しているくせにと冴珠は自分の言い回しを心の中で嘲つた。

あの懐かしい鈴の音に誘われて。誘われて どうなるのだろう。  
どうなつてしまつのだろう。冴珠にもわからない。

「どうするのか、その時にならないとわからないけど お前にだけは言つよ」

今のお自分が居る場所を示してくれたこの友人には。

「あ…ああ」

「ここも俺の居てもいい所なんだろ?」

「ああ」

最初掠れていた相槌が、今度はしつかりと返された。冴珠はもう一度月を見上げる。優しい白。包み込む光。耳を澄ますが鈴の音はもう聴こえなかつた。柔らかな夜の気配だけが辺りを支配する。

「オレも、おまえの家族もきっとそう思つてつぞ」

一真は冴珠の家を指さす。門扉と玄関の外灯は明々と灯をともし、未だ帰らぬ家族を待ち受けている。

冴珠は小さく笑つた。

「ありがとう」

一瞬、一真の脳裏に、一枚のビジョンがよぎる。

いつか、こうして冴珠は去つて行く。

一真は絶ち切るように言葉を押し出した。

「じゃあな。また明日」

「俺が風邪ひいてなければね」

「そんなデリケートな人種かよ」

「お互い様だろ」

二ツと笑つて一真は冴珠に背を向けた。少し冷たい風が一真の額を撫で、髪を緩く乱した。

冴珠はいつか、彼の月に還る。

今日のことは何なんだとか……そんなことは一真にとつて重要ではなかつた。あの冴珠が、親友が選ぶであろう場所。求めているもの。きっとここは一時の通過点に過ぎない。

それでも、いつまでもこのままでと願うのは愚かなことなのだろうか。

春の風はそれぞれの想いを抱いて、どこまでも駆けてゆく。祈りの季節は夜に沈んでいった。

あなたは、あなたの名前を呼ばれていますか。

初めて書いた長編なのでお見苦しい所も沢山あつたかと思われますが、少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

ここまでお付き合い下さって、どうもありがとうございました（）

（）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1013f/>

---

Missing Link

2010年10月9日20時01分発行